原口城跡

合志町埋蔵文化財調査報告書第１集

1984.3

熊本県合志町教育委員会

原口城跡

合志町埋蔵文化財調査報告書第1集

1984.3

熊本県合志町教育委員会

序　文

肥後考古学の黎明期といわれる昭和初期、合志町においては、故坂本経堯先生と、本町佛教寺住職大塚了城氏による堀蔵文化財の発掘調査が行なわれ、縄文後期と推定された御手洗遺跡・桑鶴遺跡が、広く学界にも紹介された。その後は、土木工事や農耕作業中に、野付・木瀬・轟等の遺跡が発見されたが、慎重を期した発掘調査は、嘗て一度も行なわれなかった。

今回は時代は下るが、中部保育園の新築工事にともなう原口城の発掘届が提出され、町も本腰を入れて、県文化課大田技師の指導を得、はじめての本格的発掘調査を行なうことが出来た。

原口城は、中世400年を通して、旧合志郡統治の拠点であった竹迫城に続く新城であり、発掘地点はその西端の一部で、城址のすべてを解明するに至ったものではないが、中世豪族の居館跡として、調査の意義は深いものがあったと思う。

ここに報告書を記録保存するにあたり、県文化課の指導に深い感謝を捧げると共に、大方の御叱声を心から期待するものである。

昭和59年３月31日

合志町教育委員会

教育長　林　　勘

例　言

1　本報告書は、合志中部保育園園舎建替に伴ない、昭和57年7月22日から8月30日にかけて、合志町教育委員会が発掘調査を実施した原口城跡の発掘調査報告である。

2　本書に記載した遺構の実測は、黒田と下村が分担して行ない、写真、製図、遺物実測等は下村が行なった。

3　出土遺物及び、実測図、写真等の記録類は合志町教育委員会で保管している。

4　参考資料として『改訂合志川荄』の竹迫城絵図を記載した。

5　本書の執筆、編集は下村が行なった。

本文目次

Ⅰ　はじめに……1

　1　遺跡の位置と環境……1

　2　調査に至る経過……1

　3　調査の組織……1

Ⅱ　遺跡の概況……3

Ⅲ　調査の記録……7

　1　遺構……7

　　(1)　掘立柱建物……7

　　(2)　地下式土壙……11

　　(3)　土壙……11

　　(4)　その他の遺構……17

　2　遺物……17

　　(1)　土師器……17

　　(2)　磁器……21

　　(3)　瓦質土器……21

　　(4)　漆器……22

　　(5)　墓碑……22

Ⅳ　おわりに……24

挿図目次

第1図　原口城跡位置図（1/2.5万）……2
第2図　原口城跡略測図（1/3000）……3
第3図　原口城跡周辺地形図（1/2500）……4
第4図　発掘調査区周辺地形実測図（1/1000）……5
第5図　調査区配置図（1/300）……6
第6図　遺構配置図(1)（1/80）……（折り込み）
第7図　遺構配置図(2)（1/80）……11
第8図　1号掘立柱建物実測図（1/50）……12
第9図　2号掘立柱建物実測図（1/50）……13
第10図　3号掘立柱建物実測図（1/50）……14
第11図　地下式土壙実測図（1/30）……15
第12図　土壙実測図（1/30）……16
第13図　土師器・磁器実測図（1/2）……18
第14図　瓦質土器実測図(1)（1/3）……19
第15図　瓦質土器実測図(2)（1/3）……20

図版目次

図版1　（上）調査区西側全景　（下）a・b－1区遺構出土状況
図版2　（上）調査区東側全景　（下）e－1区東壁土層断面
図版3　（上）a・b－3・4・5区遺構出土状況　（下）1・2・3号掘立柱建物出土状況
図版4　地下式土壙出土状況
図版5　土壙出土状況　（上）6号土壙　（中）7号土壙　（下）9号土壙
図版6　遺物出土状況　（上）土師器　坏　（中）瓦質土器　火舎　（下）漆器椀圧痕
図版7　出土遺物(1)　土師器（皿・坏）　青磁（碗）
図版8　出土遺物(2)　瓦質土器（擂鉢）　漆器（椀）
図版9　出土遺物(3)　瓦質土器（火舎）
図版10　（上）天正十七年銘墓碑　（下）墓碑銘
図版11　竹迫城絵図

表目次

表1　出土遺物一覧表……23

Ⅰ　はじめに

1　遺跡の位置と環境

原口城跡は、合志町のほぼ中央部、豊岡字宮の本に所在する。合志町は熊本市の東北部、阿蘇外輪山から西に向って伸びた広大な合志台地上に位置するが、中央部は菊池川の支流、塩浸川によって開析され、舌状台地を形成する。この開析された台地部には、幾久富（ホクドミ）、竹迫（タカバ）、豊岡（トヨオカ）などの大きな集落が存在し、現在、町の中心地となっている。原口城跡も開析された不定形の台地上に位置し、現在の町の西北部に当る。原口城跡の東北方300mの上庄には、中世城郭の遺構を良く残す町指定史跡の竹迫城がある。合志町の基軸となった竹迫氏、合志氏の居城で、城域はかなり広く、周辺には城跡に関連する地名も多く残存している。原口城自体も竹迫城の一郭ではなかったかと考えられている。

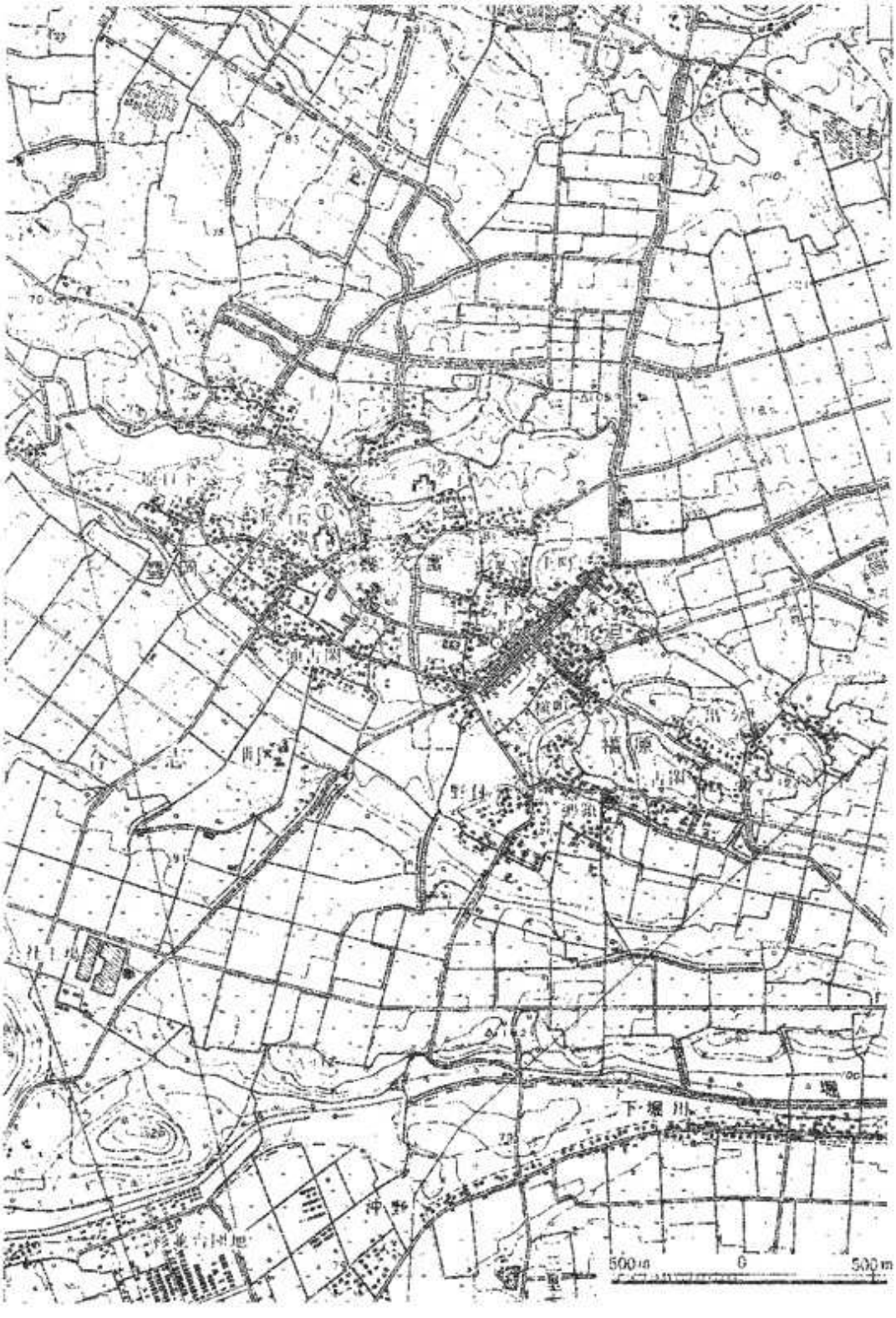
2　調査に至る経過

原口城跡の北東部は、旧豊岡小学校の敷地となっていたが、小学校移転後は合志町中部保育園が校舎の一部を園舎として使用していた。しかし、最近老朽化が激しく園舎建て替えの計画が持ち上り、町教育委員会では周知の遺跡であるため、県教育委員会と遺跡の取り扱いについて協議を行なった。試掘調査は、昭和57年３月11・12日に県文化課の大田幸博技師が行ない、計画地内に８箇所の試掘溝をあけ、土壙やピット群、土師皿などの遺構、遺物を検出した。かなり削平を受けているものの、原口城関係の遺構が存在すると推察されたため、町では57年度事業として７月22日から８月30日まで計画地内の発掘調査を行なうことになった。

3　調査の組織

調査主体	合志町教育委員会	調査補助	黒田裕司（肥後考古学会会員）
調査責任者	坂本行雄（教育長）	調査協力	福嶋　熙（中部保育園長）
調査総括	斉藤豊四（社会教育課長）		福嶋龍一（中部保育園副園長）
調査事務	早田　豊（社会教育係長）		坂田和弘（県教委文化課）
調査指導	隈　昭志（県教委文化課主幹）	調査作業員	斉藤義友　大久保芳元　橋本忠夫
	大田幸博（県教委文化課技師）		野田裕之　島居信介　清永博史
	阿蘇品保夫（熊本市立高校教諭）		斉藤房子　月野照美　斉藤ハツ代
調査員	下村悟史（肥後考古学会会員）		

尚、調査にあたっては、地元町文化財保護委員会の方々をはじめ、広瀬正照、鍋嶋俊彦（県教委文化課）、中村幸史郎、倉原謙治、坂本重義（山鹿市教委）、吉永明（八代市教委）、青木俊明の諸氏、及び合志町中部保育園より諸々のご協力、ご援助を賜わった。



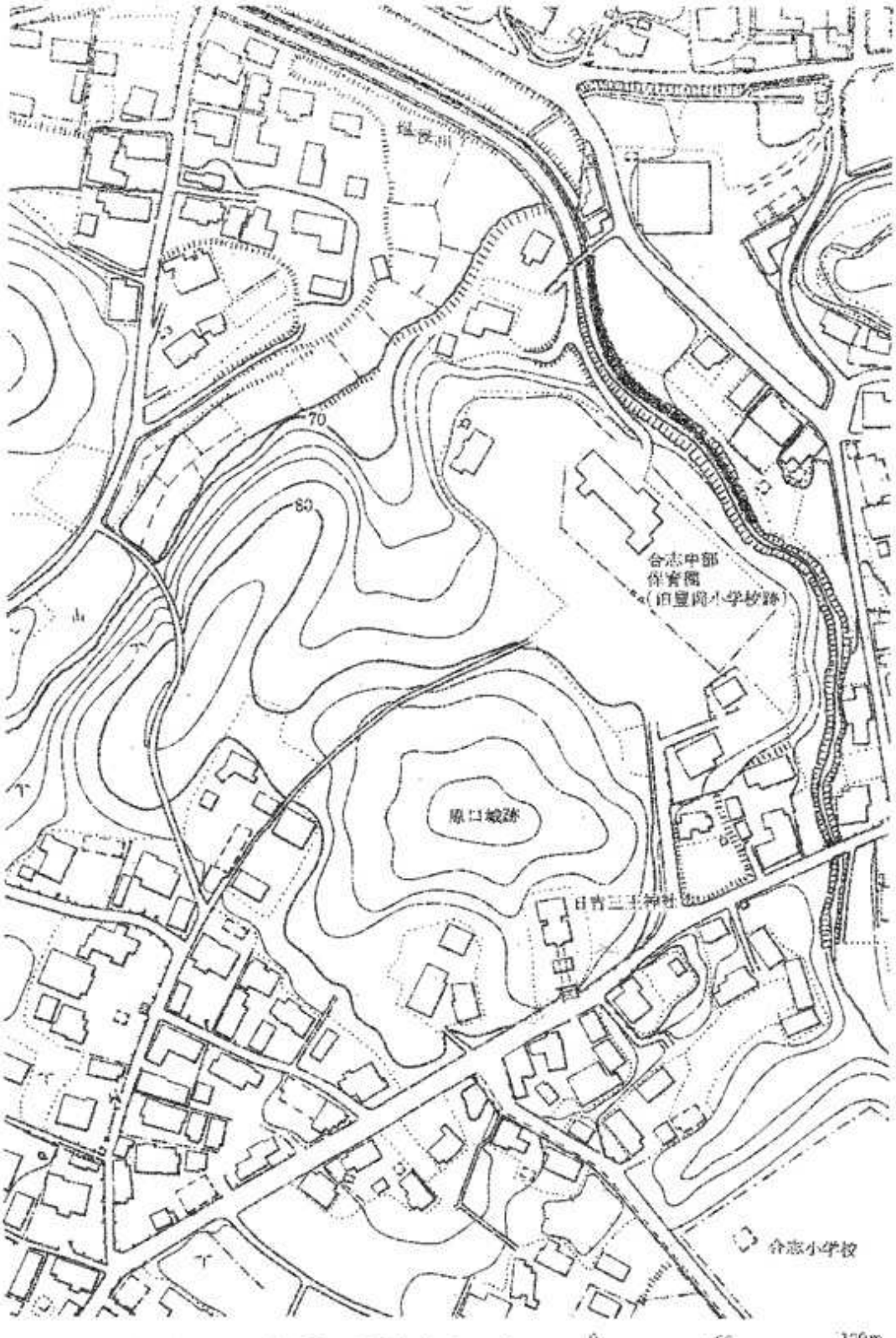
第1図　原口城跡位置図（1/2.5万）①原口城跡　②竹迫城跡

II　遺跡の概況

原口城跡は、塩浸川の西岸台地上にあり、地元の人々は新城跡と称する。昭和50年度から3ヵ年に亘る県文化課の中世城館緊急調査の一環として、城に原口城跡の略測、遺構確認調査が行なわれている。[註1] それによると、日吉三王神社裏側に幅10mの鉤型に伸びる空堀りが確認されている。東西方向80m、南北方向50mを測り、深さは1～1.5m程度である。空堀りの内側と外側には、幅6～7m、高さ0.5～1mの土塁が巡り、外側の土塁の方が内側に比べてやや高い。空堀りの北側及び東側は4～5mの崖となっており、南側は一段低くなって現在の墓地に続く。日吉三王神社一帯の土塁と空堀りに囲まれた部分は、ひとつの独立した区画をなしていることが分る。更に西側にも同様な土塁で囲まれた方形区画を看て取ることができる。原口城跡ではこの部分が地形的に一番高く、中心的な位置を占めていたものと推察することができる。

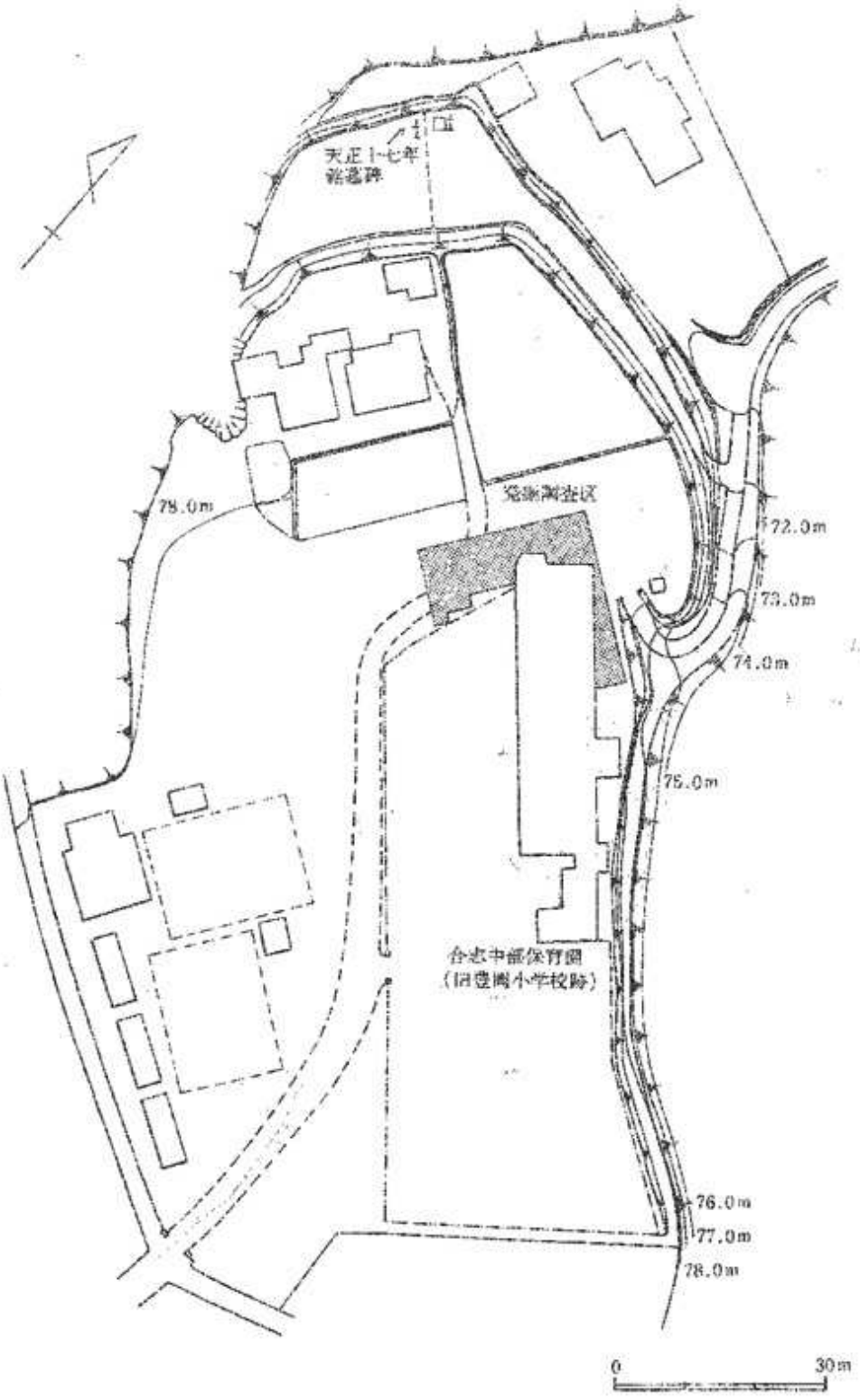
三王神社東北部は、旧豊岡小学校の敷地となっており、現在は削平されて平坦化している。もともと、三王神社続きの台地が伸びていたらしく、大正10年頃に学校敷地として造成する前

第2図　原口城跡略測図（1/3000）（註1）



第3図　原口城跡周辺地形図（1/2500）

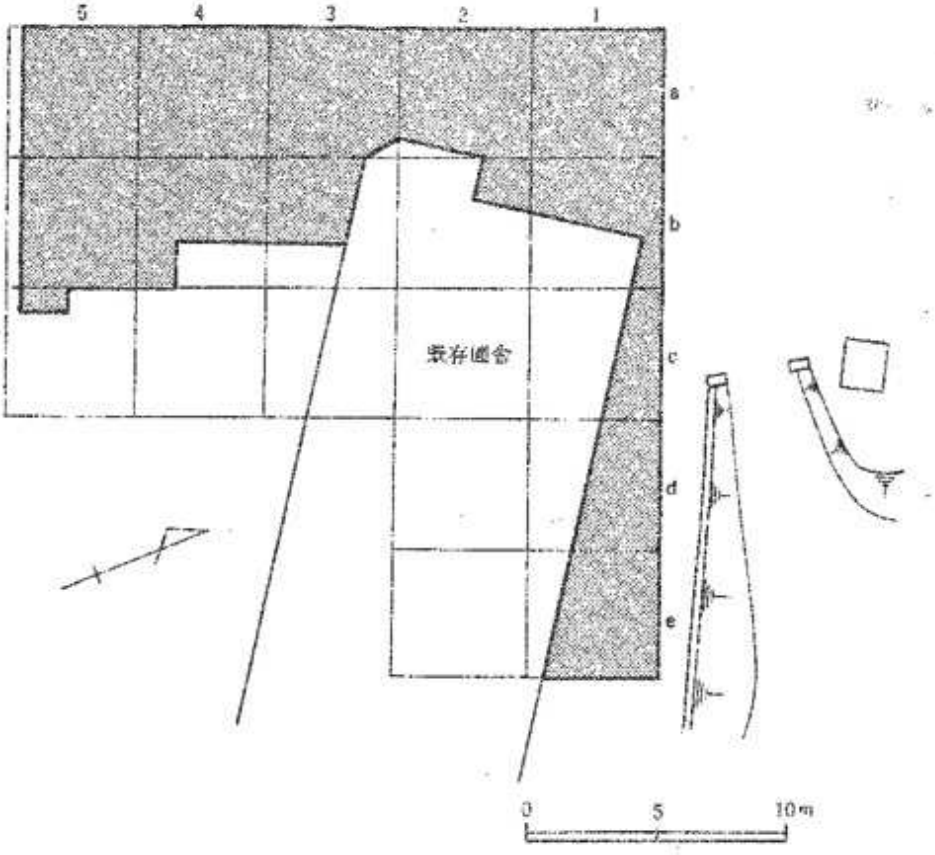
0　50　100m



第4図　発掘調査区周辺地形実測図（1/1000）

までは、高台や土塁らしき遺構も存在したらしい。学校敷地の更に北西側は、舌状に突出した台地となっており、西側は谷が入り込み、北・東は崖落ちとなって塩浸川で画されている。学校敷地下には、谷の延長か空堀り状の掘り込みが、湾曲して入り込んでいたらしく、以前は上庄から登ってくる道がこの部分を通っていたらしい。この谷状の掘り込みより北西部は、独立した丘陵状を呈し、ひとつの区画をなしているものと考えられる。この部分には、地元の人の談によると、古井戸が一基存在し、周辺から人骨も多数出土したという。現在、井戸は埋め戻されて位置を確認することは出来ない。丘陵西側の谷部にも井戸が1基存在したらしい。

今回、発掘調査を行なった所は、丘陵のほぼ中央部に相当する一角である。調査区は調舎の北西側及び南東側で、調舎新設部分267㎡の内既存建舎部分を差し引いた282㎡を調査対象とした。調査区の主軸は新設調舎の建築と同一方向とし、1辺5mの方眼を組んだ。調査地区が広い城跡の一地点ということで、南北に小文字のアルファベットでaからeまで、東西に算用数字で1からもまで番号を付し調査地点名とした。地表は、旧小学校跡地となっていたため非常に硬く一部重機を使用した。表土は薄く、数十下直ぐに遺構確認をする事ができた。



第5図　調査区配置図（1/300）

Ⅲ　調査の記録

概要　発掘調査は、既存の便舎部分及び大きな立木の植っている部分を除く282㎡について行なった。この部分は田幾岡小学校の校庭や建物があった所で、かなりの削平と校舎解体時の撹乱、植木抜去の撹乱などを受けていたが、調査区全面によって遺構の存在が認められた。主な遺構としては、掘立柱建物3棟、土壙13基、地下式土壙1基、調査区東南部で検出された地状の遺構などがあげられる。遺物としては、土師器の坏や皿、瓦質土器、青磁などが遺構や包含層から出土し、地下式土壙では漆塗椀の圧痕が確認できた。

1　遺構

(1)　掘立柱建物

1号掘立柱建物（第8図、図版3）　調査区西側a・b－3・4区で検出されたもので、西側部分は未調査区に伸びる。主軸をN－52°30′－Wにとり北西－東南棟の建物である。桁行は確認できる部分で2間、梁行2間で、2×3間かそれ以上の桁行を持つ建物であったことが考えられる。桁行総長は、遺構全体が確認できていないので分らないが、確認できる部分では、西側が410cm以上、東側が420cm以上となる。柱間の距離は、P1－P2間が210cm、P2－P3、P5－P6間がそれぞれ200cm、P6－P7間が220cmとなり柱間によって距離が若干異なる。梁行は総長390cmを測り、柱間の各距離は195cmとなる。柱穴の掘り方は、径28cmから50cm近くになるものまであり、バラつきがみられるが、概ね30cmから40cm程度にまとまる。柱穴の幾つかには柱痕の確認できるものがあり、径15cmを測る。他の柱穴の柱も径15cm前後のものであろうと推察される。柱穴の深さは、確認面から、深いもので53cm、浅いものでは40cmを測り、全体的にかなり削平を受けているものとみられる。柱穴からの出土遺物は非常に少なく、僅かにP2から土師器片が出土したが、実測に耐え得るものではなかった。

2号掘立柱建物（第9図、図版3）　1号掘立柱建物と同じa・b－3・4区で確認されたもので、1号掘立柱建物と切り合いになる。つまり、1号掘立柱建物のP5・P6・P7の柱穴を2号掘立柱建物のP5・P6・P7の柱穴が切った状態となり、2号掘立柱建物の方が切り合い関係からいえば時期的に新しい。規模は1号掘立柱建物と同様に2×3間か、それ以上になるものと考えられるが、西側部分が未調査区に入り、遺構全体を把握することはできなかった。主軸をN－50°－Wにとり、1号掘立柱建物より少し北に振れている。確認できる部分での規模は、西側桁行長が405cm以上、東側の桁行長が400cm以上となり、P1－P2、P5－P6、P6－P7間が200cm、P2－P3間が205cmを測る。梁行は東側部分だけ確認され、梁行総長405cmで、P3－P4間が200cm、P4－P5間が205cmとなる。柱穴の掘り方は、ほぼ円形に近く、大きいものでは48cm、小さいもので26cmを測る。柱穴の幾つかには柱痕の存在するものが

あり、径24cm前後の柱が使用されていたものと考えられる。柱穴の深さは、最も深いもので確認面から62cmを測り、浅いものでは40cm前後となる。1号掘立柱建物間線、削平を受けているものと考えられるが、部分的に残りの良い柱穴もある。P1には柱の根固めに使用したと考えられるような角礫が埋土中から検出された。遺物はP4から土師器の坏か皿の破片3点、P5から瓦質土器の火舎の小片、P6から土師皿、P7から長さ3.2cm、径4mmの鉄片などがそれぞれ出土している。2号掘立柱建物は、1号掘立柱建物と近接しており規模もあまり変らない事などから1号掘立柱建物の建替ではなかろうか。但し、柱の大きさは2号掘立柱建物の方が大きい。

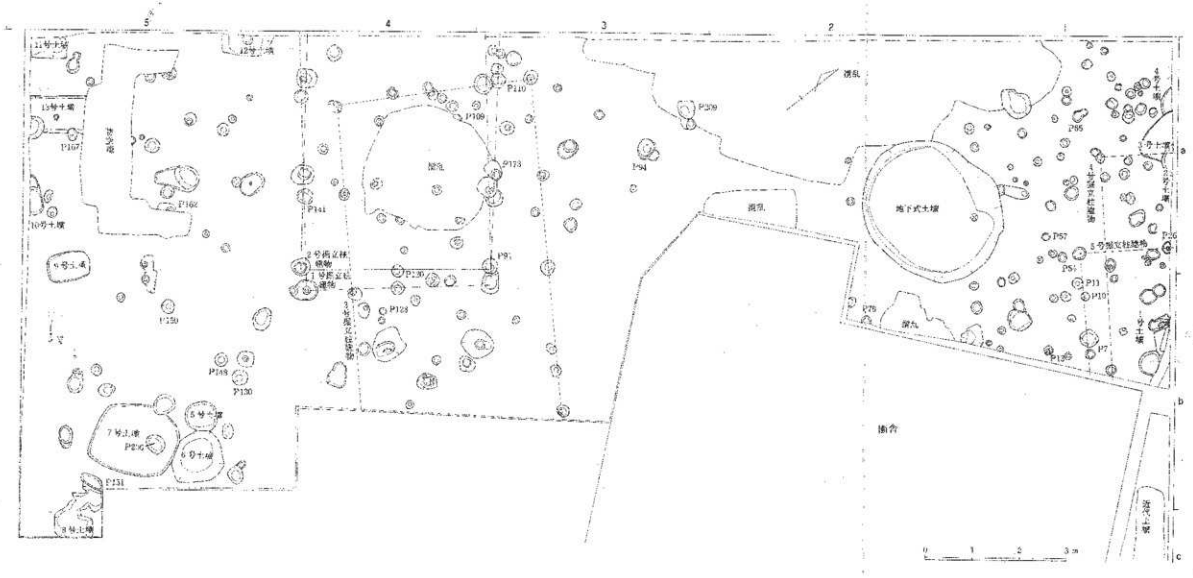
3号掘立柱建物（第10図、図版3）　1号・2号と同じくa・b－3・4区で検出されたもので、建物跡の一部は未調査区に入る。東側桁行705cm以上、西側桁行400cm以上、西側梁行420cmを測る。主軸はN－55°－Wにとり2×3間以上の建物であると考えられる。柱間はP1－P2間が他に比べてやや長く305cm、P2－P3間が195cm、P3－P4間が205cm、P4－P5間が215cm、P5－P6間が205cm、P6－P7間が190cm、P7－P8間が210cmとなる。柱間の間隔にバラつきがあり、プラン自体も少し歪になっている。柱の掘り方は円形で、径22cmから径30cmまでの間に収まってしまう。全体的に小形で、柱痕が幾つか確認できる。柱痕は径12cmから15cmを測り、小さいピットの割には柱が大きい。おそらく柱穴の掘り方ギリギリに柱を埋めたものであろう。柱穴の上面は削平を受け、遺構確認面下40cm前後から50cmの深さしか残存していない。遺物は、殆ど検出する事ができず、時期決定が困難であるが、埋土が橙褐色を呈し、他の建物の柱穴と明らかに区別する事ができる事から、この3棟の建物の中では一番新しい時期に相当するものではなかろうか。

4号掘立柱建物（第6図、図版1）　西側調査区北寄りにかなりまとまったピット群を検出したが、調査区外に広がるため、建物を全体としてまとめる事ができなかった。4号掘立柱建物はa・b－1区に位置し、主軸をN－55°－Wにとり西側の側柱だけ確認できる。桁行2間以上で2×3間か、それ以上の建物であったと推察される。残存部の柱間は230cmと220cmを測る。柱穴は小さく、20cm～30cmの間にまとまる。柱穴の上面は削平され、深さ45cm～26cm程度残存しているが、東側部分が削平が激しい。遺物は全く出土していない。

5号掘立柱建物（第6図、図版1）　4号掘立柱建物と同様a・b－1区に位置する。梁行1間、桁行1間しか確認できず、殆ど調査区外へ伸びてしまう。主軸はN－58°－Wとなり、4号掘立柱建物よりやや西に振れる。規模は判然としないが、他の建物と同様、2×3間以上の東西棟の建物ではなかったろうか。柱間は、桁行180cm、梁行190cmを測る。柱穴の大きさは26cm～40cmあり、深さは、浅いもので確認面から15cm、深いもので26cmを測り、柱穴は概して浅くかなり削平を受けているものと考えられる。遺物はP7から土師器の坏や皿、青磁雷文碗（第13図19）、P26からは土師器の坏や皿（第13図1）などが出土した。

3頁　註1

「原口城」『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集　1978


5
4
3
2
b
c
11号土壙
12号土壙
13号土壙
10号土壙
9号土壙
7号土壙
6号土壙
5号土壙
8号土壙
P167
P166
P159
P148
P130
P131
P141
P110
P109
P173
P191
P128
P94
P370
P85
P57
P51
P11
P10
P7
P13
P26
P75
溝状
溝状
溝状

(2) 地下式土壙

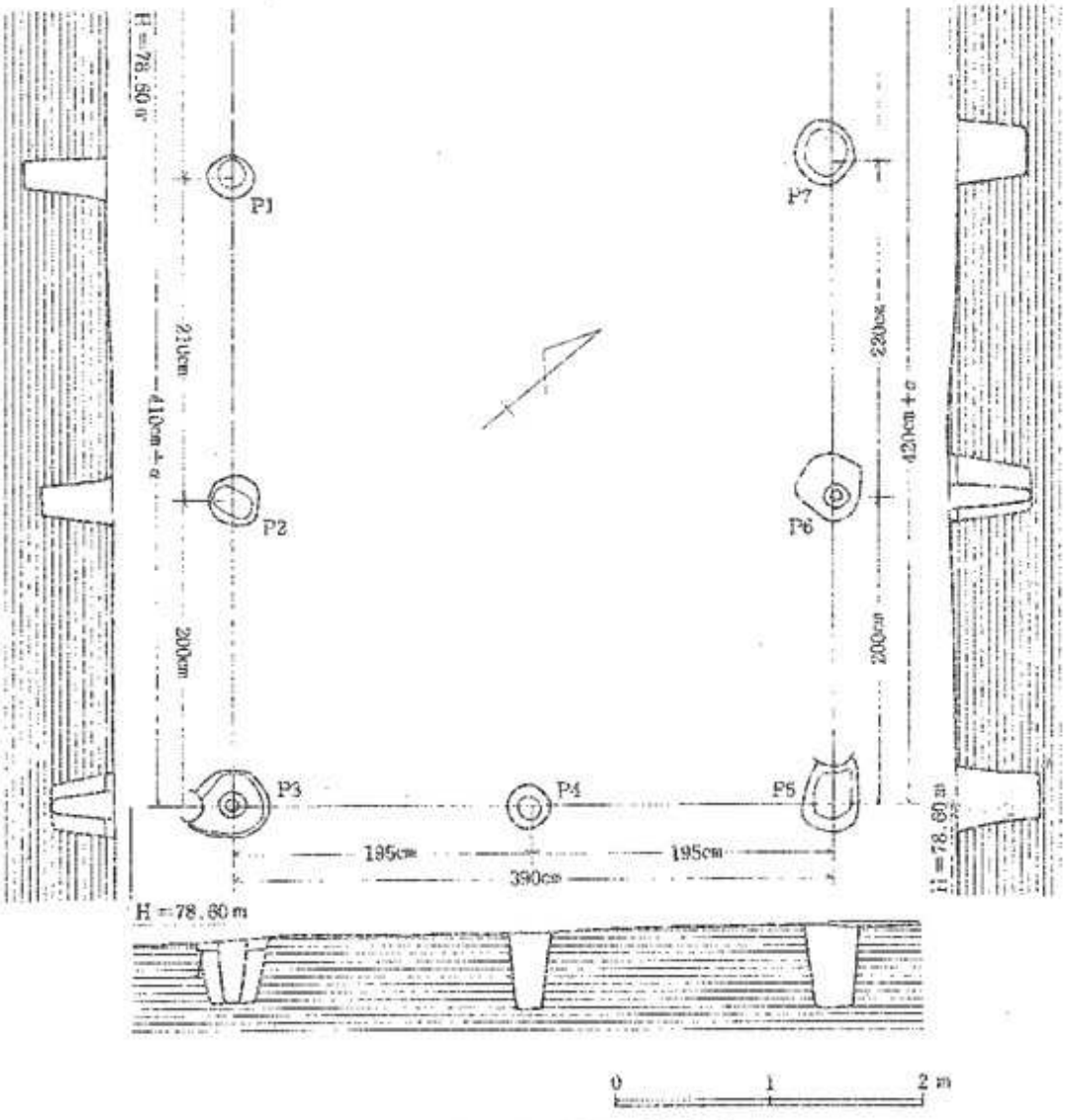
ピット群が疎らになったa－1・2区で地下式土壙1基（第11図、図版4）を検出した。天井部及び竪坑部は完全に陥没していたが、床面で竪坑部の一部を確認する事ができた。主軸をN－83°－Eにとり、規模は検出面で長径317cm、短径262cmを測る。深さは床面まで208cm、床面の長径276cm、短径は220cmとなり、オーバーハングして立ち上る。壁の上半部は崩落して土砂が流入している。土層は、Ⅰ層灰黒褐色土で、砂岩礫や擂鉢、土師片を含む。Ⅰ′層、灰黒褐色土で、橙褐色土の粒子を含み土質がソフトである。Ⅱ層、橙褐色土、基盤上面の橙褐色土の二次堆積。Ⅲ層、灰黒褐色土、橙褐色土が混じるため色調が少し明るい。土師片を含む。Ⅳ層、灰褐色土、Ⅴ層、淡灰褐色土、この2層は基盤の灰色粘質土の二次堆積土。Ⅵ層は壁の崩落したブロック。Ⅶ層は灰色粘質土で基盤の土と殆ど変らない。プライマリーに近い土質をしており、天井部を形成していたものがそのまま陥没したものではなかろうか。Ⅶ層下が床面となり、竪坑部近くの床面で漆塗椀の圧痕を検出した。木質部は殆ど腐蝕しており僅かに漆面だけが残存していた。床面からの出土はこれ1点だけで、その他土師皿や瓦質土器の火舎・擂鉢などは、堆積土の中から出土したものである。

(3) 土壙

調査区内で13基の土壙を確認した。しかし、4基を除いた他の土壙は、未調査区へ伸びており全体を把握する事ができなかった。

1号土壙 （第6図、図版1） b－1区に位置し、西側の一部を確認した。東側部分は未調査区に入る。主軸は北西－南東方向にとるもの

第7図 遺構配置図(2) (1/80)



第8図　1号掘立柱建物実測図（1/50）

と考えられる。土師器の坏や皿の破片が少量出土した。

2・3・4号土壙（第6図、図版1）　a－1区北壁付近で検出された。それぞれ切り合い関係になり、4号→3号→2号の順に新しくなる。形態は円形か長楕円形になるものと考えられるが、北半部は殆ど未調査区に入り、判然としない。深さは確認面から、2号が34cm、3号が35cm、4号が32cmとなる。遺物は、各土壙とも出土をみなかった。

5号土壙（第12図）　b－5区に位置する。主軸をN－36°－Eにとり、上面は66cm×63cmの隅丸方形に近い形となる。深さは36cmを測り、上半はある程度削平されているものと考えられる。

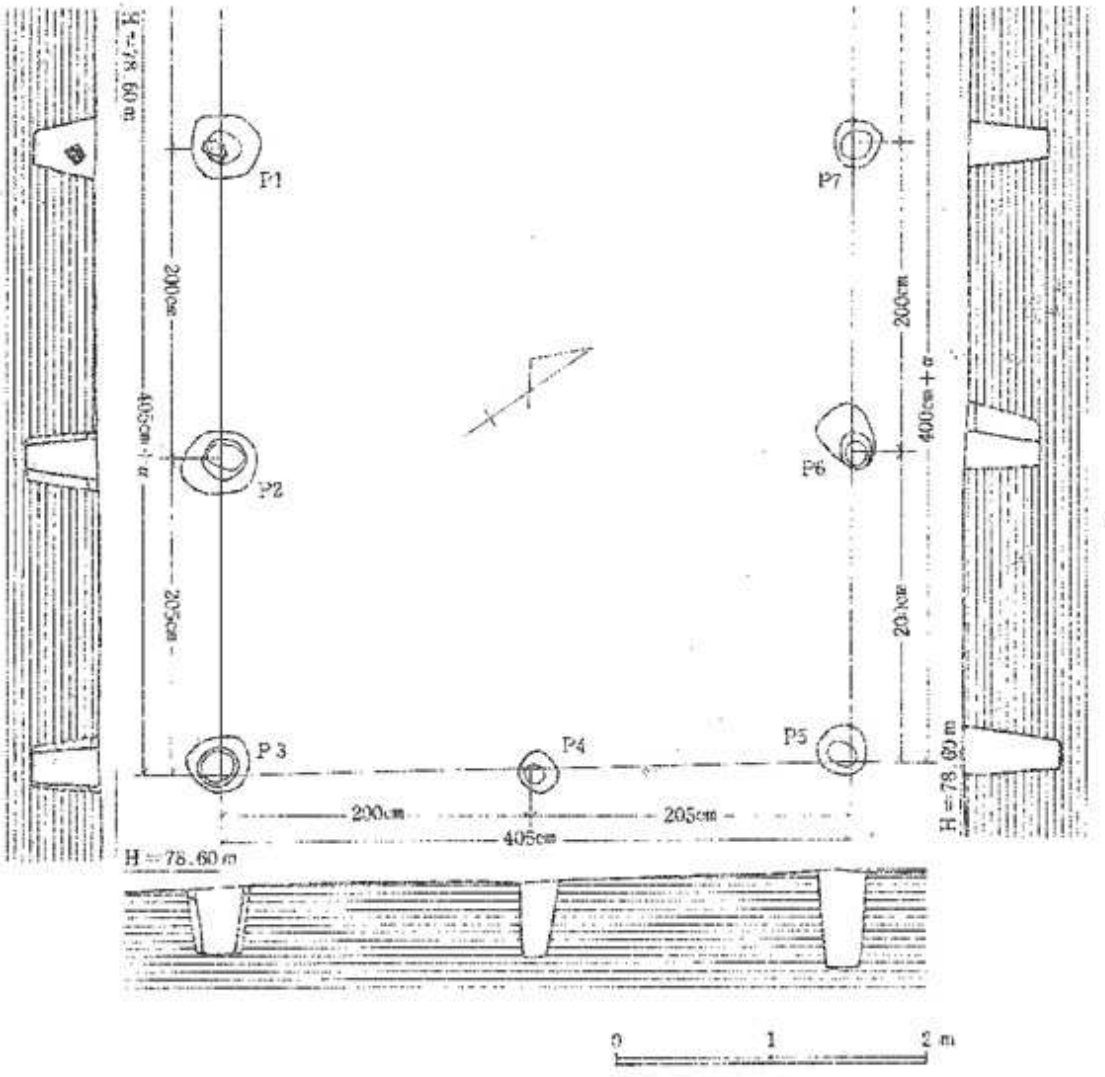
6号土壙（第12図、図版5）　5号土壙の東側に隣接している。径110cmの不整円形を呈し、深さは34cmを測る。主軸をN－21°－Eにとる。出土遺物は、土師皿片や瓦質土器の火舎（第15図1）

などがある。

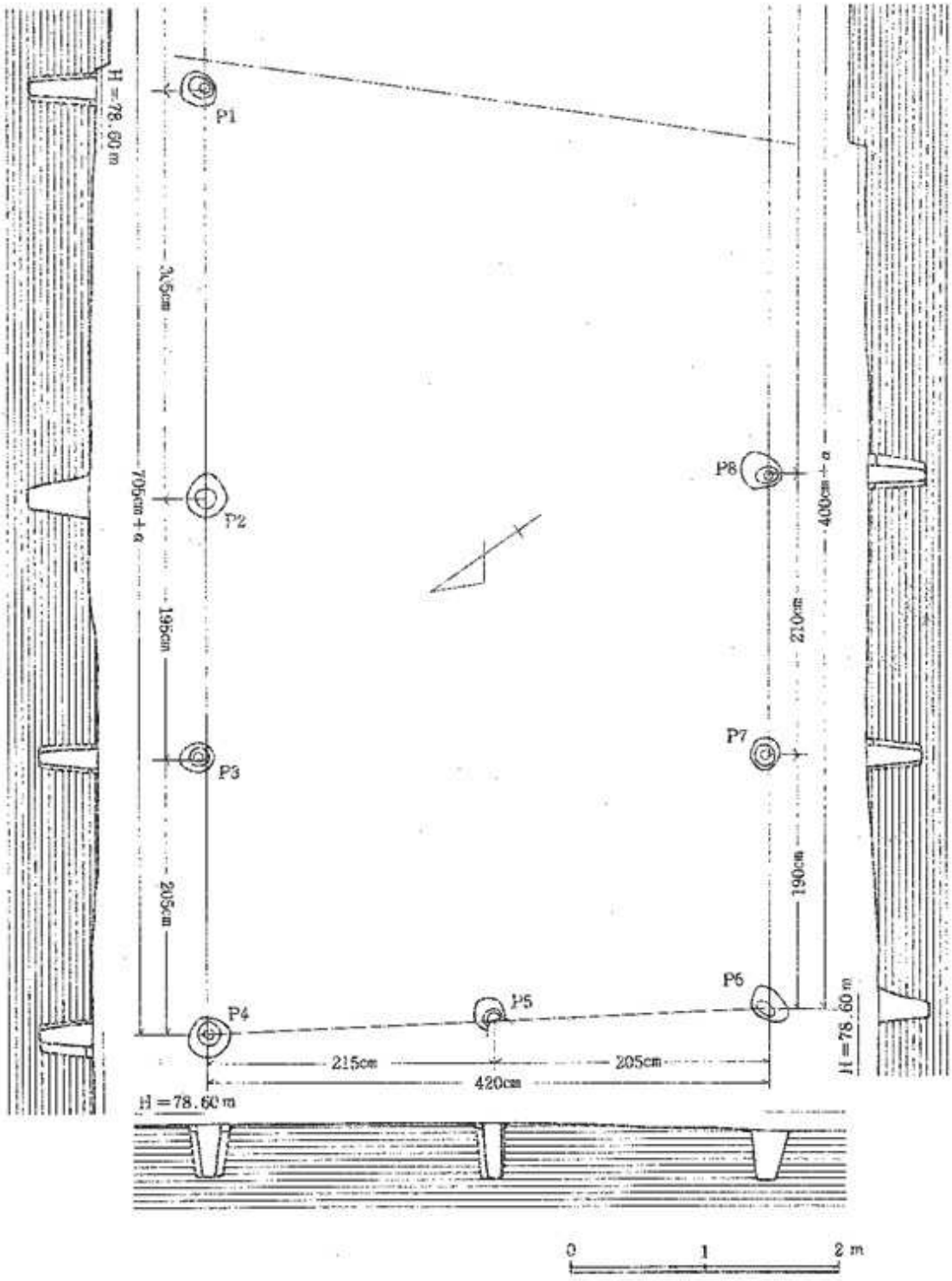
7号土壙（第12図、図版5）　6号土壙の南西側に隣接し、6号土壙を一部切っている。上面はかなりカットされ底面だけしか残存していない。主軸をN－57°－Eにとり、180cm×152cmの隅丸方形に近いプランを有する。遺物は土師器と瓦質土器（火舎）の破片が少量出土したのみである。

8号土壙　（第6図）　c－5区に位置し、東側は未調査区に入り、西側は撹乱で一部壊わされている。長軸方向80cmを測る。遺物は殆ど検出できなかった。

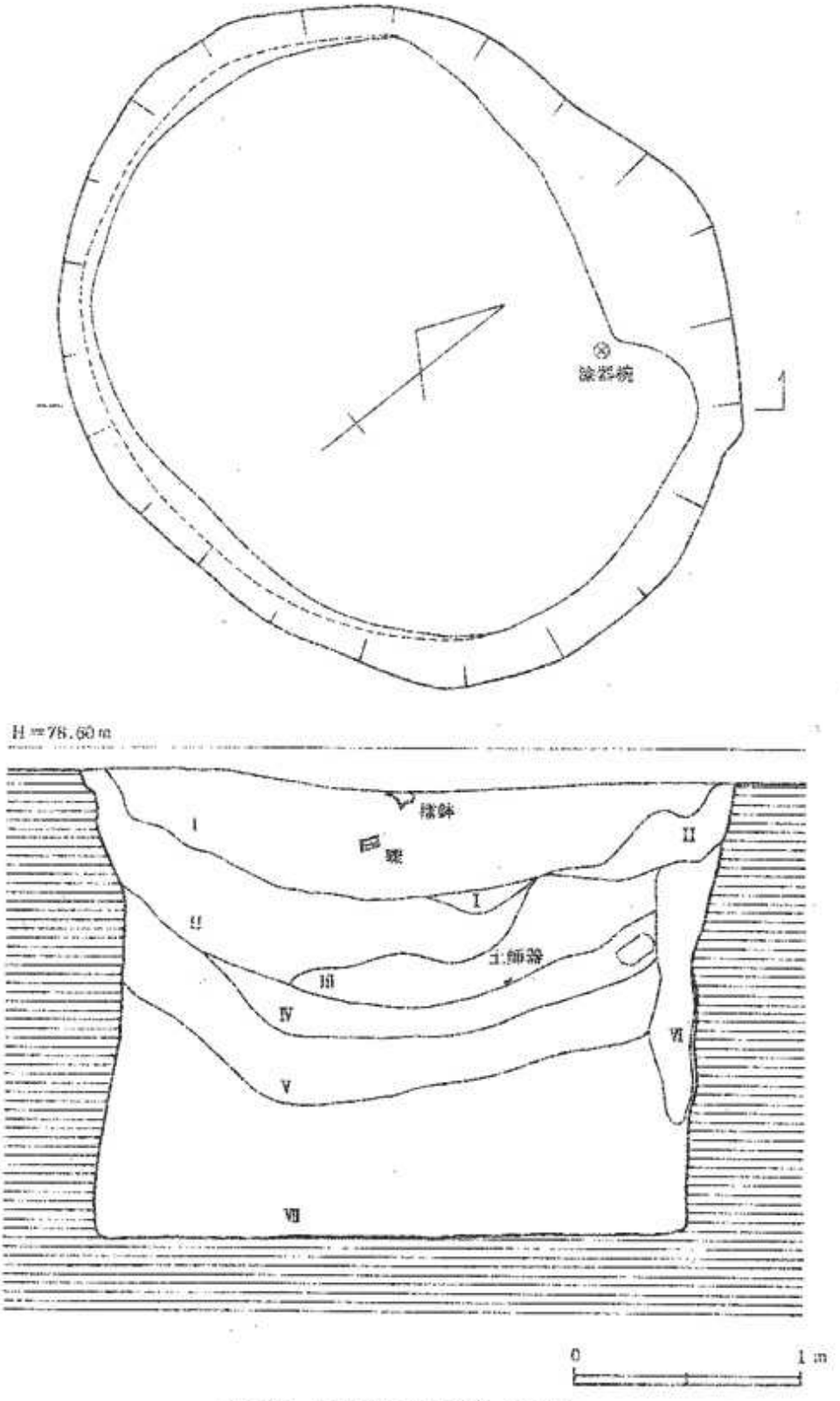
9号土壙（第12図、図版5）　a・b－5区に跨って位置し、長径90cm、短径62cmを測る。上面は著しく削平を受け、辛じて底面が残存していたに過ぎなかった。主軸はN－31°－Eにと



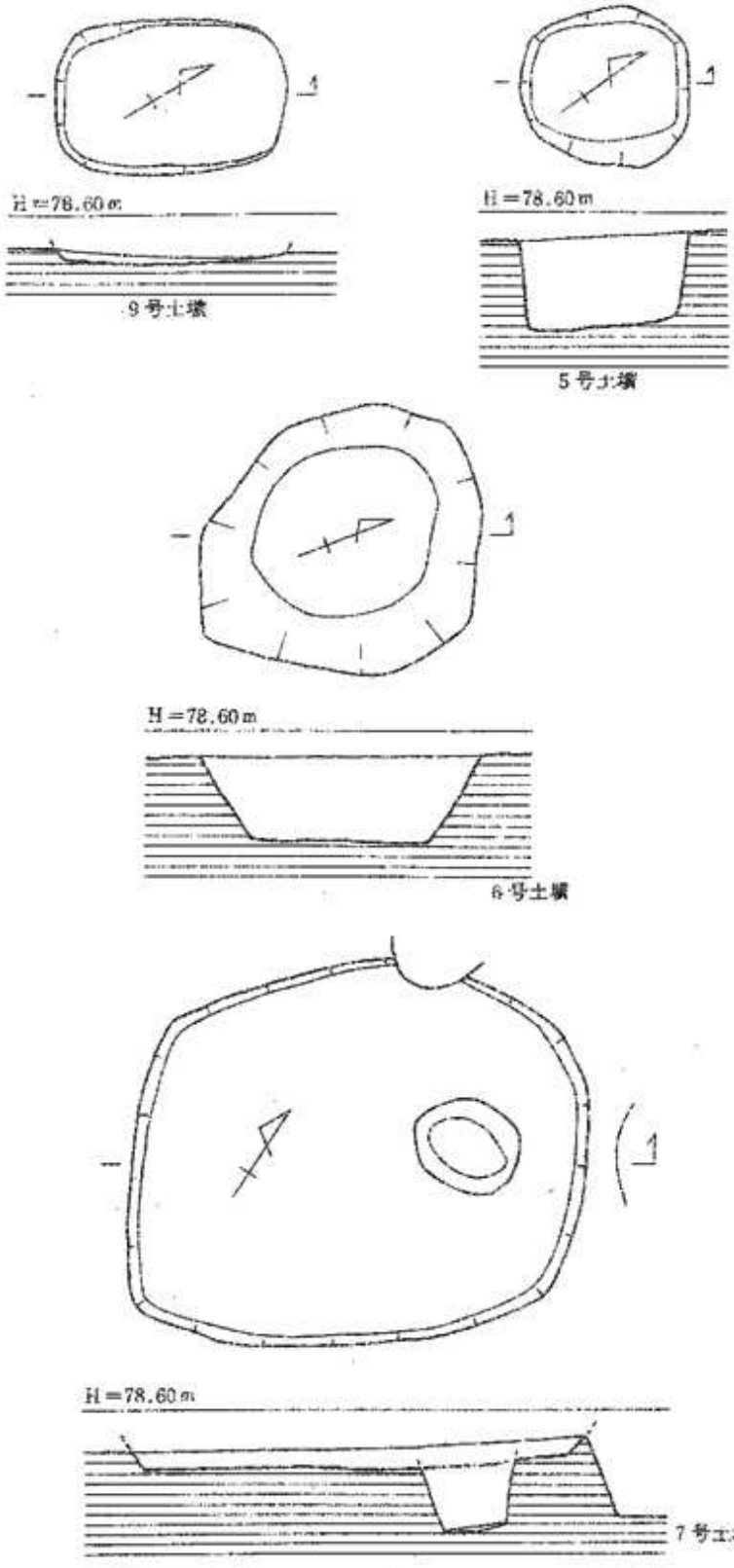
第9図　2号掘立柱建物実測図（1/50）



第10図　3号掘立柱建物実測図（1/50）



第11図　地下式土壙実測図（1/30）



第12図　土壙実測図（1/30）

り小判形を呈する。遺物は土師皿片が2点出土した。

10号土壙（第6図） 9号土壙の西側に位置する。長径60cm、深さ18cmを測る。南半部が未調査区に伸びるが、楕円形を呈するものと考えられる。遺物は検出できなかった。

11号土壙（第6図） a－5区の西隅で検出され、西半部は調査区域外となる。現在長76cm、深さ56cmを測り、掘り方の確りした長方形土壙と考えられる。

12号土壙（第6図） a－4・5区に位置し、東半部しか確認できなかった。長径110cm、深さ15cmを測る。上面はかなり削平され、隅丸方形のプランを有する。遺物は出土しなかった。

13号土壙（第6図） a－5区で検出されたもので、北端部を防空壕で切られ、南端部は調査区外となる。現存長120cm、幅80cm、深さ18cmを測る。主軸をN－38°－Eにとり、長方形土壙か溝状遺構の可能性もある。遺物は青磁碗の底部（第13図21）が1点出土している。

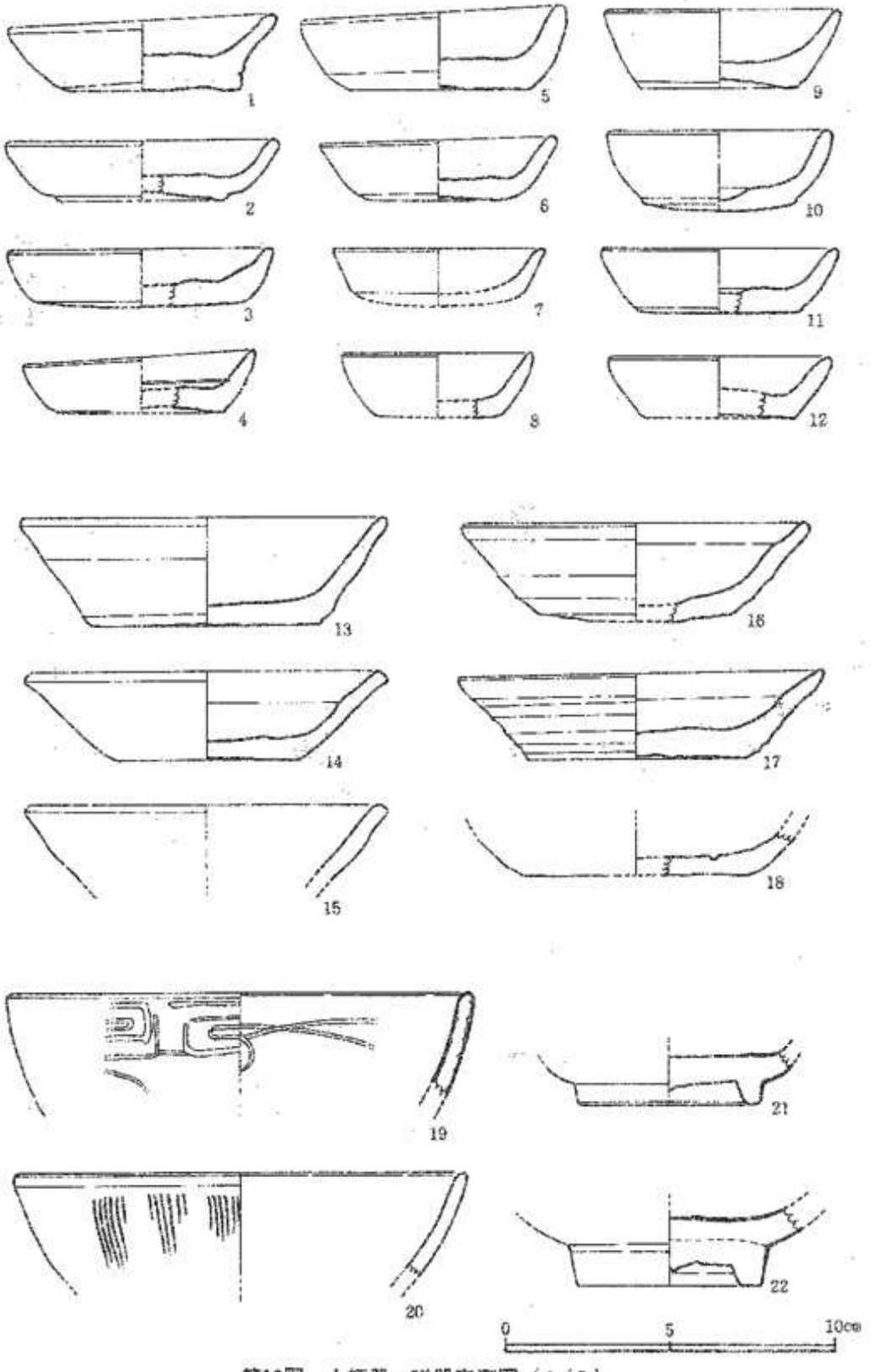
(4) その他の遺構

調査区東側部分のd－1区から道路状遺構、e－1区から堀状の遺構（第7図、図版2）が確認された。道路状遺構は、N－63°－E方向に伸びており幅260cmを測る。ロームが浅く掘り窪められた状態となり、園舎部分に向って登り坂となる。旧豊岡小学校が造成される以前まで、上庄方向から登る道路として使用されていたものではなかろうか。道路状遺構から90cmの平坦部をおいて、更に南側は掘り方が緩やかに落ち込み、堀状となる。－2mまで掘り下げたが、整地層が続き底まで達しなかった。調査区が狭い事と調査区東側が急な崖になっているため、掘り下げを断念した。この堀状の遺構は略測図（第2図）に破線で示す堀状の遺構に相当するものであろうか。遺構中の整地層から土師器の坏や皿、青磁、瓦質土器などが出土した。

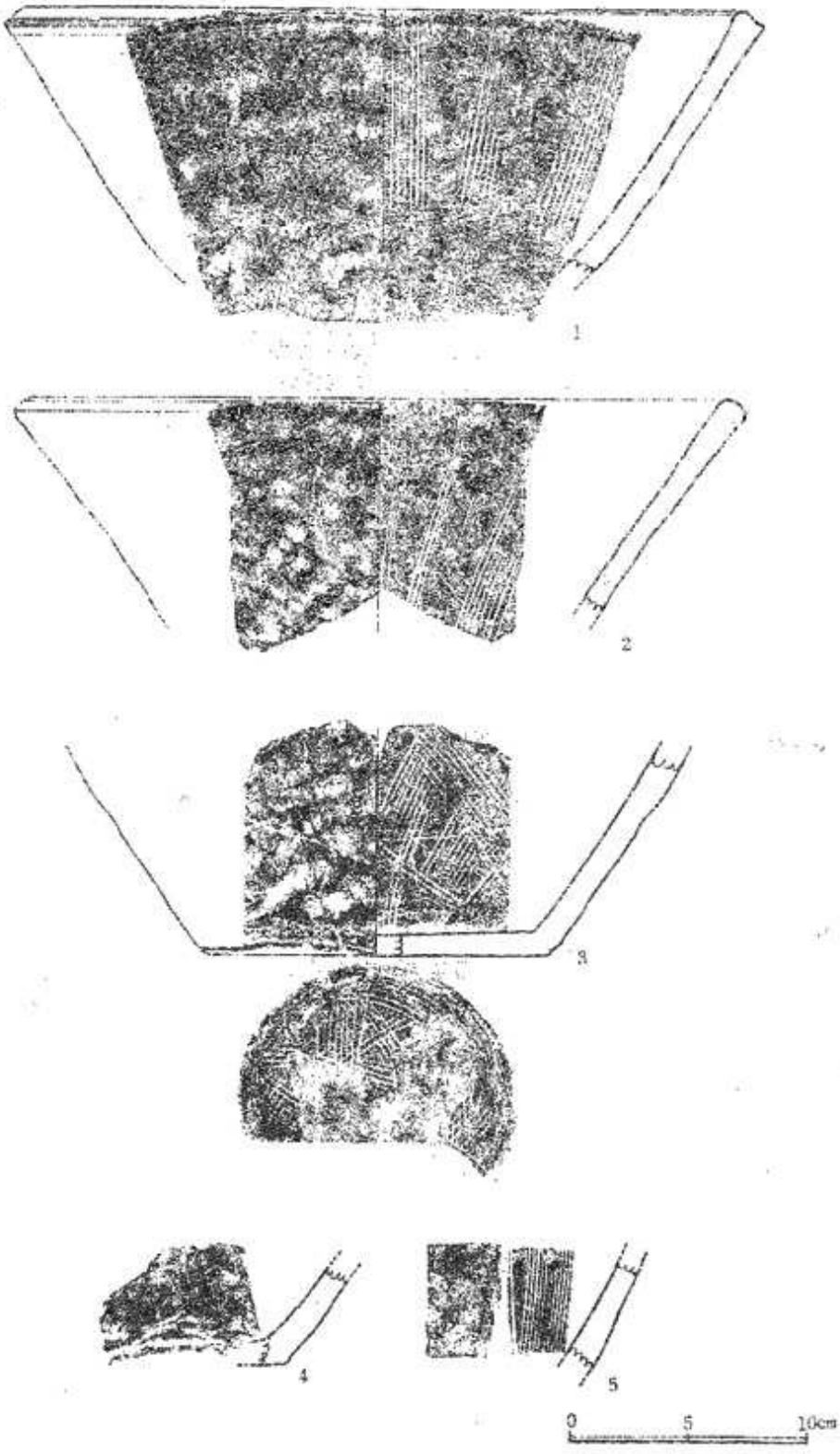
2 遺物

(1) 土師器

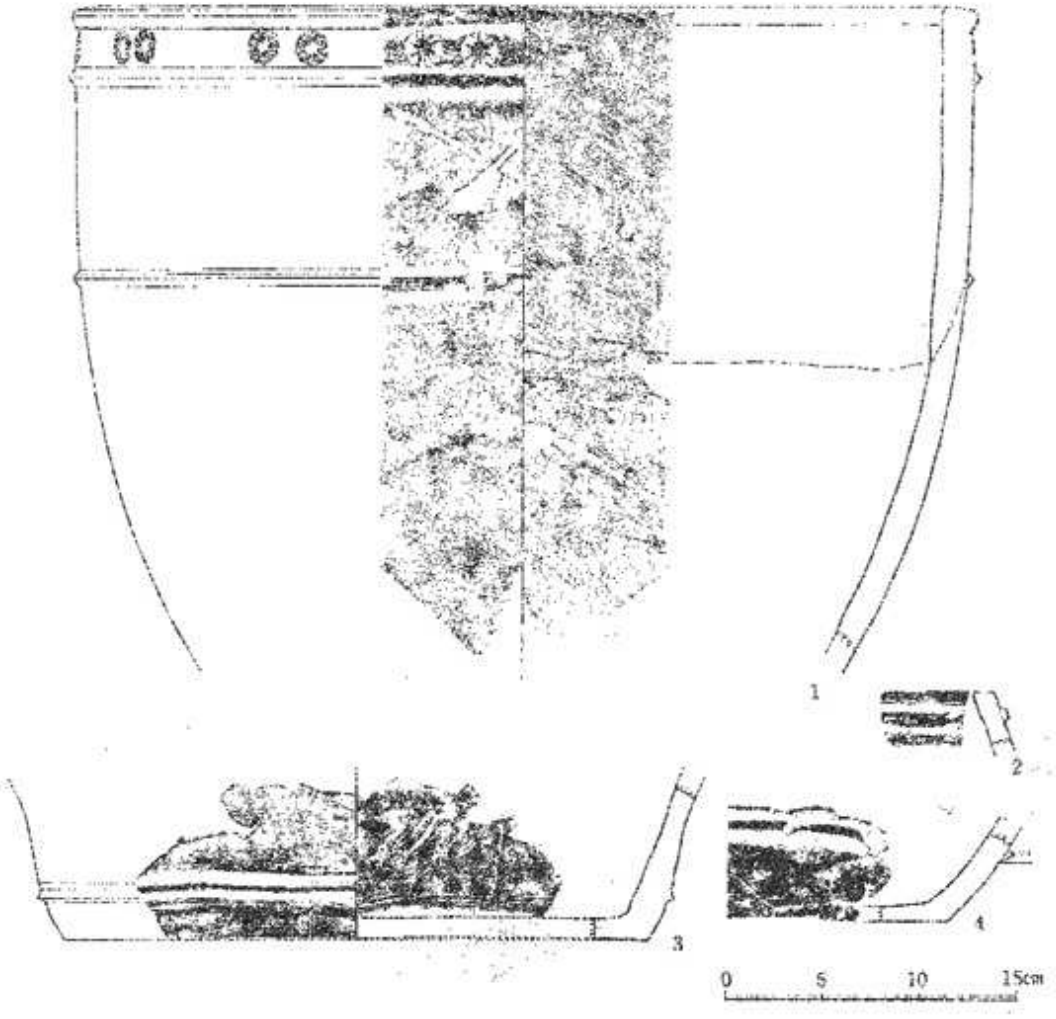
皿（第13図1～12図版7）、全て糸切り底で、口径8.2cm～5.8cm、器高2.5cm～1.8cmを測る。1は底部が厚ぼったい作りで、底部に切り離しの際のキズが沈線状に残る。褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが焼成良。かなり歪な器形を持つ。P－26出土。2は、内底に緩やかな段を持ち口縁部は湾曲しながら外反する。底部は切り離しによって少し歪になる。淡黄灰色を呈し胎土に砂粒、赤色粒子を含む。焼成やや良。e－2区出土。3は、厚ぼったい作りで器高が低い。褐色を呈し胎土に赤色粒子を含む。c・d・e－1区出土。4は少し歪な器形で口縁端部は尖る。内面に細い沈線が巡る。調整は3と同様。c－1区出土。5は地下式土壙から出土したもので、厚手作りである。胎土に赤色粒子を含み、焼成は良くない。6は内底に緩やかな段を持ち底部がやや凹む。褐色を呈し、胎土に砂粒や赤色粒子を含むが焼成堅緻。b－3区出土。7は口縁部の破片、淡灰褐色で砂粒を含むが焼成良。P－173出土。8は簡単な作りで、褐色を呈し、胎土に砂粒を



第13図　土師器・磁器実測図（1/2）



第14図　瓦質土器実測図（1/3）



第15図　瓦質土器実測図(2)（1/3）

含む。焼成はあまり良くない。b－5区出土。9は作りが良く、淡黄灰色を呈し、胎土に赤色粒子を含む。焼成良。底部が少し窪む。P－209出土。10はa－3区から出土したもので底部が少し張らみ、内底がやや窪む。色調は黒褐色で胎土に砂粒を含むが焼成は堅緻である。11は内底に細い沈線を巡らす。淡黄灰色で、砂粒、赤色粒子を多く含むが、焼成は良い。地下式土壙出土。12はやや厚手作りで、茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成やや良。P－130出土。

坏（第13図13～18、図版7）　全て糸切り底である。口径10.5cm～11.2cm、器高2.6cm～3.3cm、底径5.6cm～7.0cmを測る。13はやや粗雑な作りで器形が少し歪になる。底部の一端は糸切り放しの際に生じたと思われる張り出し部分がある。器体外面は僅かなふくらみをもって口縁部に至る。色調は灰黒味を帯びた褐色で、胎土に微砂を含む。焼成はあまり良くなく風化している。c－1区出土。14は、底面と口縁部内面に僅かな段を持つ。作りは割と良く、胎土に2～

3mm台の砂粒を含むが、器表は肌理細かい。焼成は堅緻で淡灰褐色を呈する。13と同様c－1区出土。15は口縁部のみで、13の器形と同じ様に外面がやや膨らむ。褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成はあまり良くない。c・d・e－1区出土。16はP－94から出土したもので、口縁部内側に稜を持つ。底部は少し張らみ不安定な器形となる。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが、焼成は良い。17は、14、16と同様口縁部内面に稜を持つ器形となる。口縁部は尖り、外面にはナデ調整による荒い調整痕を残す。器形が歪で、底部も厚く、粗雑な作りである。色調は淡褐色から褐色を呈し、胎土に砂粒と赤色粒子を含む。焼成は良好。P－10出土。18は底部のみで、内面に沈線が巡る。褐色を呈し、胎土に砂粒と赤色粒子を含む。焼成はあまり良くない。c・d・e－1区出土。坏は全て内外面共ナデ調整が施されている。

(2) 磁器

青磁（第13図19～22、図版7） 青磁が全部で6点出土した。その内、図示し得るものが4点ある。19は青磁雷文碗である。口縁部の破片で復元口径14.2cmを測る。灰白色の精良な陶胎に淡緑色の釉をかける。P－7出土。20は外面に6～7本単位の猫掻沈線文を施した青磁碗である。陶胎は灰白色の精良なもので、淡灰緑色の色調を呈する。釉は薄く、作りそのものは余り丁寧でない。b－4区出土。b－4区からは他に鎬蓮弁文を施す青磁碗の小破片も出土している。くすんだ灰緑色の釉調を持ち、陶胎は灰色を呈し精良なものである。21は青磁碗の底部である。底径5.6cm。陶胎に若干砂粒を含み、色調は淡緑灰色を呈する。焼成は良好で磁化が進んでいる。見込みと底部内面は露胎となる。13号土壙出土。22も底部で底径5.6cmを測る。釉調は灰緑色を呈し、陶胎は灰色で精良であるが肌理が少し荒い。畳付と底部内面は露胎となっている。c・d・e－1区出土。同区から青磁碗の口縁部小破片も出土している。灰色精良な陶胎に淡灰緑色の釉をかける。

(3) 瓦質土器

擂鉢（第14図、図版8） 1は復元口径32cmで、口縁部は肥厚し、端部が少し窄む。口縁外面に細い沈線を施す。灰色を呈し、胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。内面には、工具による右斜下方向のナデの後、7～8本単位の平行沈線を入れる。外面は、上半部が工具による左斜下方向のナデ、下半部は指圧による調整を行なっている。内面下半部には使用によるとみられる横方向の擦痕が多数観察される。a－1区出土。2は器体がやや外反気味になり口縁部に向って厚味を増す。色調は灰色～暗灰色で、胎土に2～3mmの砂粒を多く含む。焼成は割と良い。内面は工具による右斜下方向のナデの後、数本単位の平行沈線を不規則に入れる。外面はナデと指圧による調整が施されている。粗い作りで、口縁端部はかなり磨滅している。地下式土壙出土。3も地下式土壙出土で、擂鉢の下半から底部に至る部分である。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好である。内面には9本単位の平行沈線を斜格子状に交差さ

せて施し、底面には、周縁をとった後、同じ様に平行沈線を交差させる。外面はナデと指圧による調整がみられ、底部に近い部分はヘラ削りの後、沈線を一条巡らす。4は、擂鉢というよりも捏ね鉢の底部かも知れない。粗雑な作りで、灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。e－1区出土。5は小破片で全体を窺い得ないが、内面に10本以上の単位で平行沈線を施す。外面はナデ調整で、色調は灰色を呈し、胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。

火舎（第15図、図版9）　1は6号土壙の覆土中から出土したもので、下半部を欠失する。口径46.6cm、現存高33.5cmを測る。口縁端部は外側に突出し、上面は平坦となる。口縁下部には三角突帯をめぐらし、口縁端部と三角突帯に挟まれた部分に12弁の菊花文を3個1組でスタンプする。三角突帯は胴部にも一条めぐらす。色調は外面が淡黄灰色、内面は黒茶褐色でカーボンが付着する。胎土には赤色粒子や砂粒を含み、焼成は良好である。外面は全面に亘って工具によるナデ調整が施され、横方向に砂粒が動き細かい条線となっている。内面接合部上半は、右斜下方向のヘラ状工具による規則的なナデ調整が施され、接合部は手ナデ、更に下半は、ヘラ状工具による右斜下及び横方向のナデ調整が施されている。2は内傾する口縁部片で、外面に台形状の突帯を付す。さらにその下に菊花のスタンプ文を施す。灰色を呈し、胎土に砂粒を含むが焼成は堅緻である。e－1区出土。3は、火舎の底部片で、復元底径30cmを測る。器体下半部には三角突帯を貼付し丁寧にナデ付けている。色調は内外面黒色を呈し、器壁断面は茶褐色を呈する。胎土に赤色粒子と砂粒を含むが、焼成は良好である。外面はヘラ状工具によるナデ、内面には横方向及び斜方向の条痕が観察される。破片が小さいので判然としないが底面には僅かな弯曲があり、底面に脚の付く可能性がある。地下式土壙出土。4も地下式土壙出土で底部から体部に至る破片である。外面に三角突帯を一条めぐらし、底面には脚が付く。色調は茶褐色で一部黒斑が認められる。胎土には赤色粒子を含み、焼成は良好である。内外面共ナデ調整が施されている。

(4)　漆器

地下式土壙床面で漆器椀の圧痕（図版6・8）を検出した。口径15.0cm、器高5.5～6.0cm、高台径8.0cm、高台高1.7cmを測る。器壁は椀部については判然としないが、高台部は4～5mm程度あったものとみられる。辛うじて漆面が一部残っており、褐色地に朱漆で文様を描く。文様は口縁部に径5mm程の円文と数本の条線文が認められ、高台内面にも文様を施す。文様の全体像ははっきりしない。

(5)　墓石

台地先端部で天正十七年銘の墓石（図版10）を発見した。安山岩製で南面しており、銘文は、「　　　

表1　出土遺物一覧表

調査区及び遺構名	出土遺物	挿図　図版
a－1区	土師器片(坏)2　(不明)1	
a－2区	土師器片(坏)2　(皿)3　(甕)1　土師器(皿)1	第13図2　図版7
a－3区	土師器片(皿)1　土師器(皿)1	第13図10　図版7
b－1区	土師器片(坏)1	
b－3区	土師器片(不明)3　土師器(皿)1	第13図5　図版7
b－4区	青磁片(碗)1　青磁(碗)1	第13図20　図版7
b－5区	土師器片(坏)2　(坏か皿)19　(不明)4　土師器(皿)1	第13図8　図版7
a・b－1区	土師器片(坏か皿)2	
c－1区	土師器片(坏か皿)15　鉄片1　土師器(坏)2　(鉢)1	第13図4、13、14　図版7
d－1区	土師器片(坏か皿)12　(甕)1　(不明)1	
e－1区	土師器片(坏か皿)12　(甕)3　瓦質土器片(碗)1　(鉢)2 (火舎)1　磁器片2　瓦質土器(擂鉢)1　(鉢)1　(火舎)1	第14図1、4　図版8 第15図2　図版9
e・d・e－1区	土師器片(坏か皿)15　(甕)6　青磁片1　土師器(坏)2　(皿)1　青磁鉄釉1	第13図3、15、18、22　図版7
d・e－1区	土師器片(坏か皿)9　(甕)7　瓦質土器片(擂鉢)1　(不明)1	
地下式土壙	土師器片(坏)5　(甕)26　瓦質土器片(擂鉢)1　(火舎)1　陶器片(徳利か?)3 土師器(皿)2　瓦質土器(擂鉢)3　(火舎)2　須恵器(鉢)1	第13図5、11　図版7 第16図2、3、5、図版8 第15図3、4　図版8、9
1号土壙	土師器片(坏か皿)3	
6号土壙	土師器片(甕)4　(鉢)1　瓦質土器(火舎)1	第15図1　図版9
7号土壙	土師器片(坏か皿)1　瓦質土器片(火舎)1	
8号土壙	鉄片1	
9号土壙	土師器片(甕)2	
13号土壙	青磁(碗)1	第13図21　図版7
P－7	土師器片(坏か皿)3　青磁(碗)1	第13図19　図版7
P－10	土師器(坏)1	第13図17　図版7
P－11	陶器片(甕)1　P－54出土の甕片と同一個体か?	
P－13	土師器片(坏)1	
P－26	土師器片(坏)2　土師器(皿)1	第13図1　図版7
P－54	陶器片(甕)1　P－11出土の甕片と同一個体か?	
P－57	土師器片(坏)1	
P－65	土師器片(坏)1	
P－79	土師器片(坏)2	
P－91	瓦質土器片(火舎)1　P－206出土の火舎と同一個体か?	
P－94	土師器片(坏)4　土師器(坏)1	第13図16　図版7
P－109	土師器片(皿)3	
P－110	鉄片1　長さ3.2cm幅1cmの釘状のもの	
P－120	土師器片(坏か皿)3	
P－123	土師器片(不明)1	
P－130	土師器片(坏か皿)1　土師器(皿)1	第13図12　図版7
P－141	土師器片(皿)1	
P－146	土師器片(坏か皿)1	
P－150	土師器片(坏か皿)1	
P－151	青磁片(碗)1	
P－162	土師器片(坏か皿)3	
P－167	土師器片(坏)3	
P－173	土師器片(皿)1　土師器(皿)1	第13図7　図版7
P－206	瓦質土器片(火舎)1　土師器片(皿)1　火舎はP－91出土の火舎と同一個体か?	
P－209	土師器片(坏)2　土師器(皿)1	第13図9　図版7

Ⅳ　おわりに

原口城跡は絵図面（図版11）でも分るように竹迫城の一部に含まれており、『合志川荼』には、建久年間に竹迫氏の祖である中原師員が竹迫城に移るまでの館と伝えている。地元では新城と呼び、日吉三宝神社裏には土塁や空堀（注1）りに囲まれた方形区画が幾つも残っている。立地的な面や遺構の残り具合などからみれば、居館址と考えても差しつかえあるまい。

ところで、発掘調査区はこの中心部から東北方へ200m離れた、標高も4m程下がった地点に位置する。調査区内では掘立柱建物を5棟復元する事ができた。ピット群の分布から二箇所の建物群が存在すると考えられる。調査では、2×2間及び2×3間の柱間を確認したが、調査区の制約からいずれも桁行総長が分らない。柱間の間隔からすれば、2×4間か2×5間の建物を想定する事ができるであろう。柱間は30cmを1尺として換算すると、6.5尺から10尺までであり、柱間によって差異がある。7尺前後が最も多い。ところが、梁行総長は1号が13尺、2号が13尺5寸、3号が14尺と端数なしで割り切れる。それぞれの建物の柱間には若干差異が認められるが、梁行総長は整数で割り切れる事から、桁行総長も整数で割り切れる規格を持っていたものではなかろうか。建物の先後関係は、切り合いから1号が最も古く、2号、3号と新しくなる。梁行総長も1号から3号にかけて数値が大きくなっている。4号、5号については、大部分が調査区外へ伸びるため、実体が判然としない。

次に、土壙と地下式土壙についてであるが、土壙は掘立柱建物を取り囲むように分布する。形態はそれぞれ異なっているが、墓壙の可能性がある。台地北側には人骨が多数出土したとの伝承もある。地下式土壙は、ピット群の希薄なa－1・2区に所在し、床面から漆器椀が出土した。地下式土壙は、北部九州では居館址や城跡に関連する遺跡（注2）から多く出土し、熊本県下でも20遺跡30基（注3）以上が知られている。殆ど中世に属し、内部から瓦質土器や土師皿などが出土する。漆器椀の出土は非常に珍らしい。今回調査した地下式土壙は、掘立柱建物との関係から墓壙以外の貯蔵穴か、或いはそれに類するものと考えた方が良いかも知れない。

さらに、台地先端部で、天正十七年銘の天台宗僧侶の墓石が確認された。1基だけではあったが、付近の遺構群の性格を考える上で参考になる。つまり、今回検出した建物群は、原口城の東北部に当り、まわりに墓壙や墓碑、それに人骨出土の伝承も残っている事などから、僧坊か或いはそれに関連する建物ではないかと考えられるのである。しかも、この部分は略測図にみる環状遺構によって区画された所である。

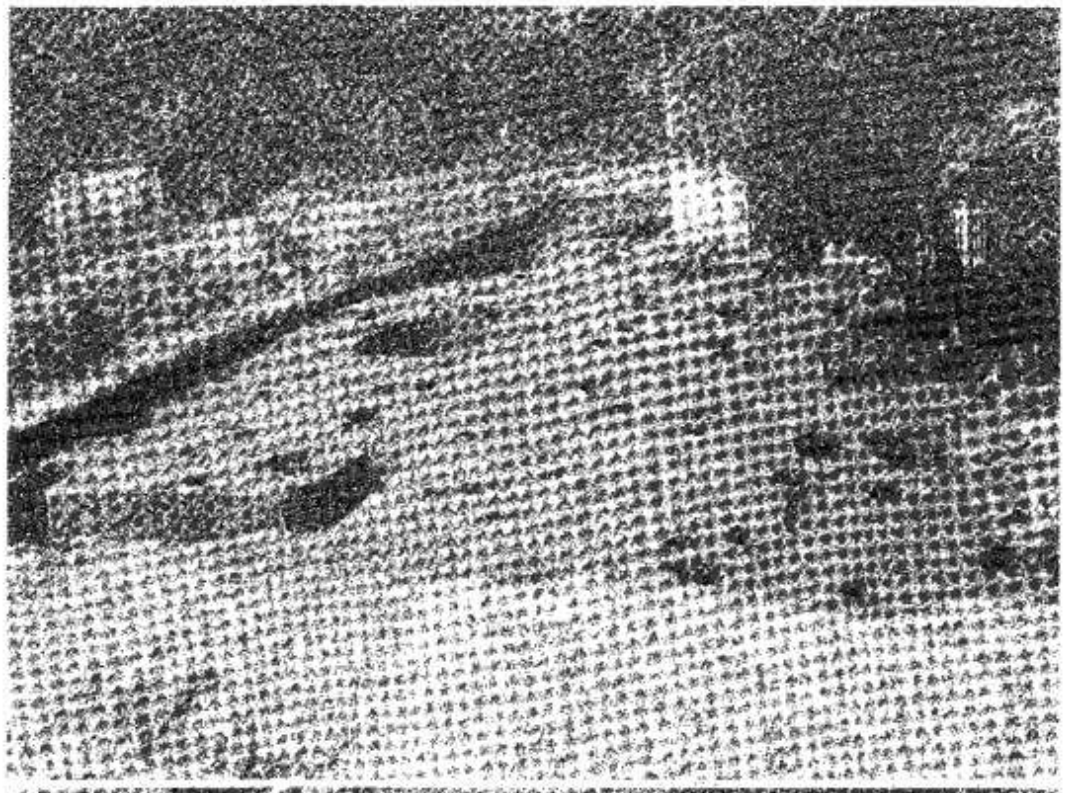
したがって、今回の調査で検出した遺構群は、独立した丘陵上に営なまれた僧坊か或いはそれに関連する建物の可能性があり、各遺構は有機的な関連のもとに営なまれたものと考えられる。時期的には出土遺物から15・16世紀、中世末の年代を与える事ができよう。

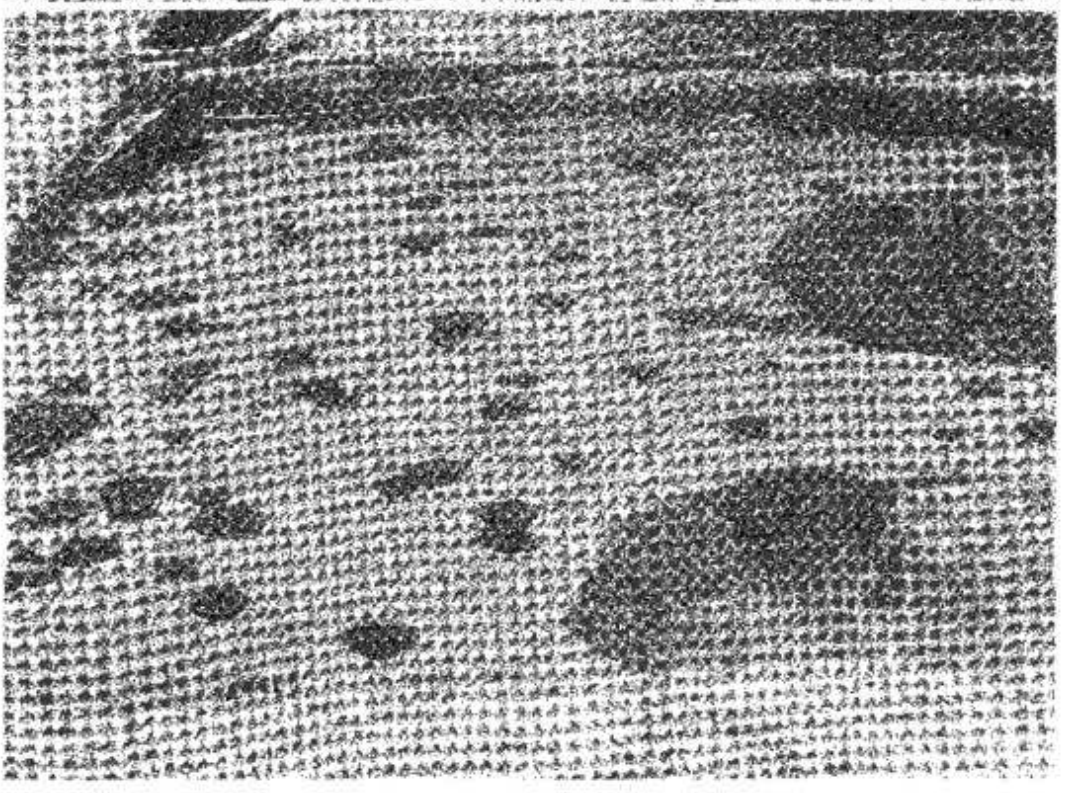
注1　「原口城」『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集　1978

注2　横山邦継、後藤宗俊『板付周辺遺跡調査報告(2)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集　1975
　　柳沢一男編『板付周辺遺跡調査報告書(7)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第65集　1981

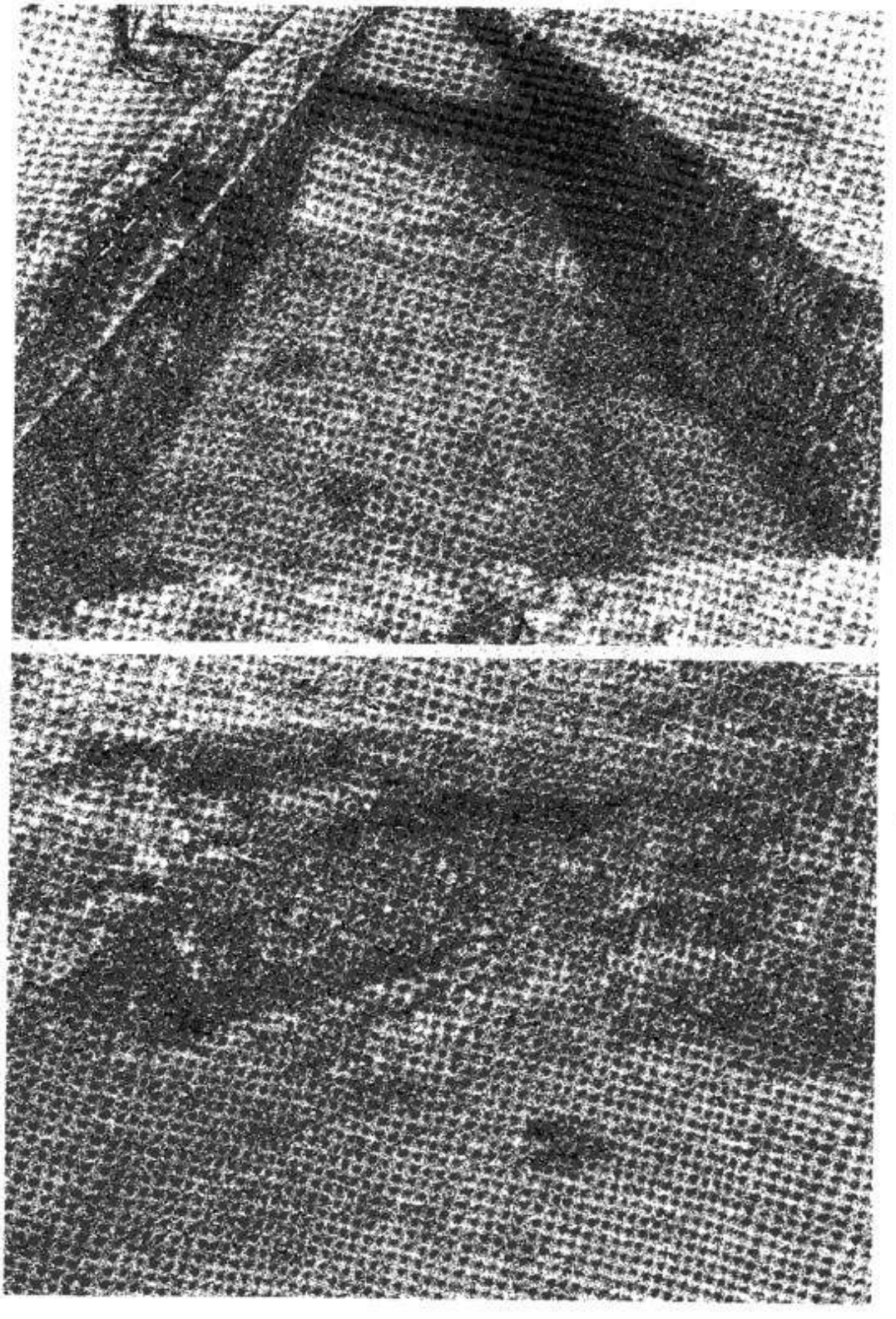
注3　富樫泰三編『宇城地方の地下式土壙群』『宇土半島　自然と文化』第2巻所収　1982

図　　版

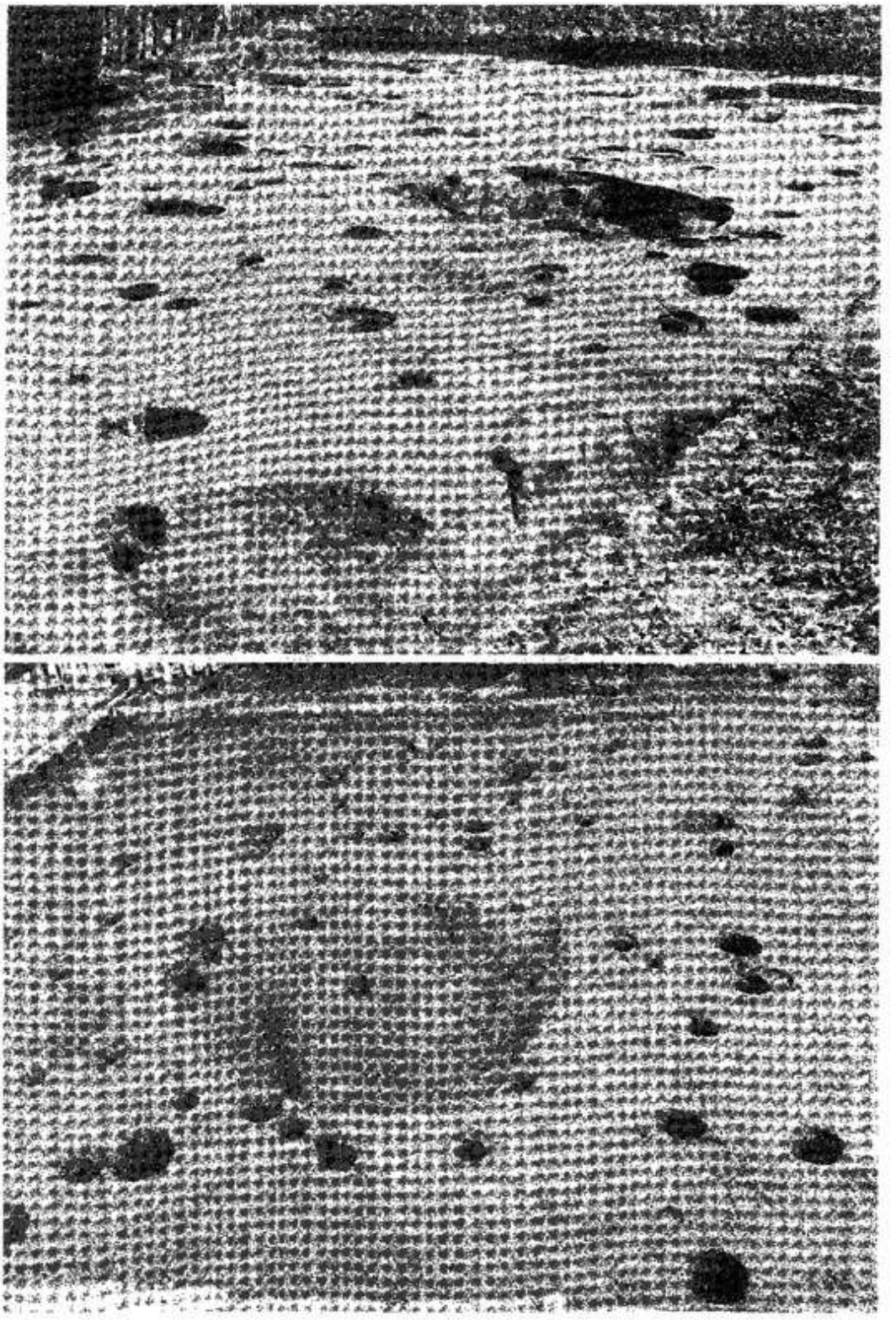




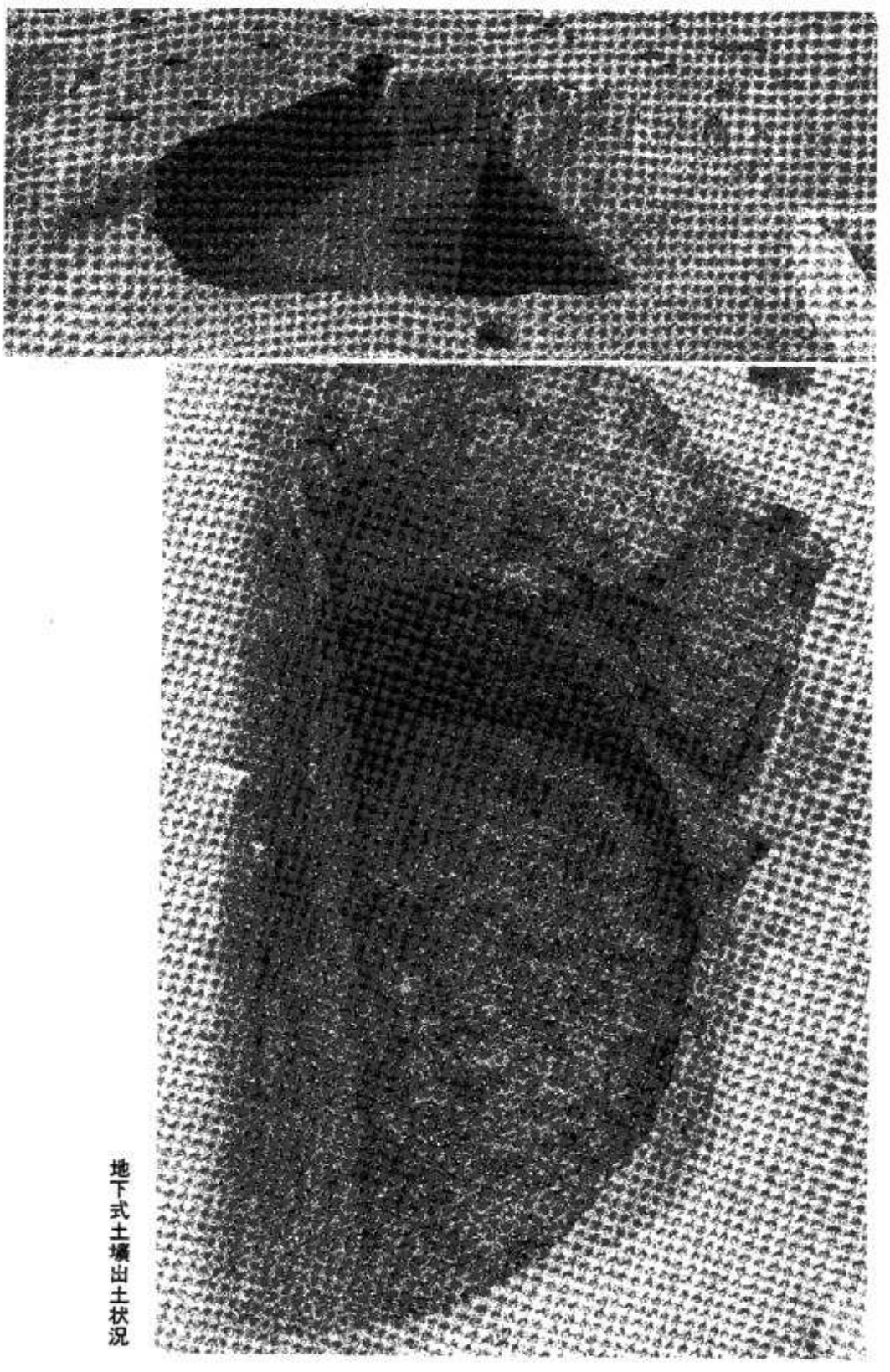
(上)調査区西側全景　(下)a・b－1区遺構出土状況



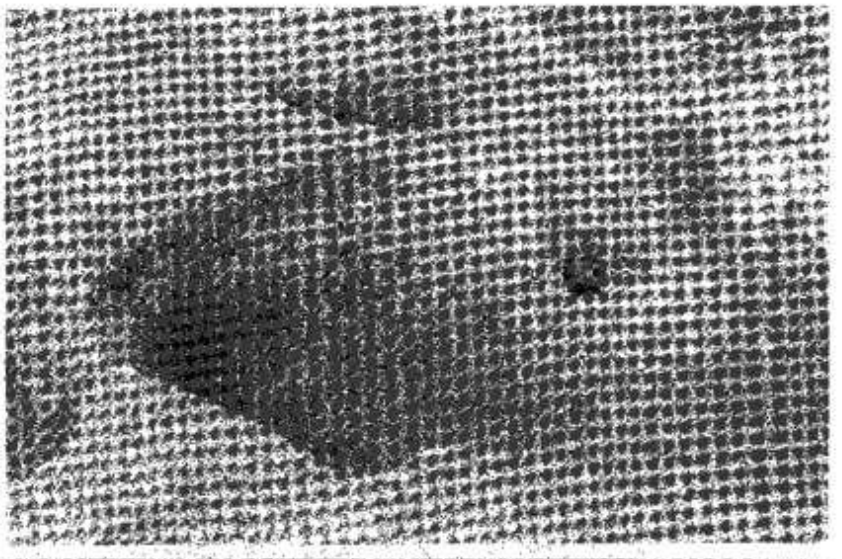
(上)調査区東側全景　(下) e－1区東壁土層断面

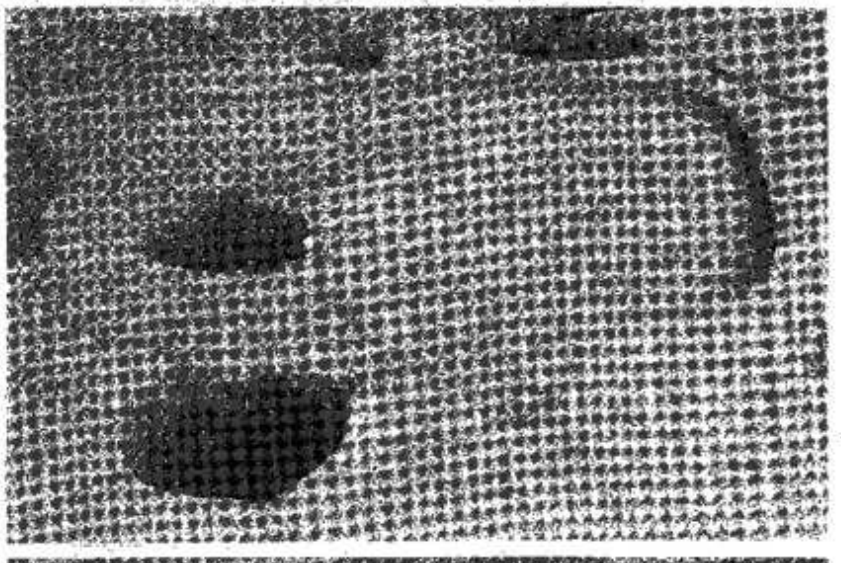


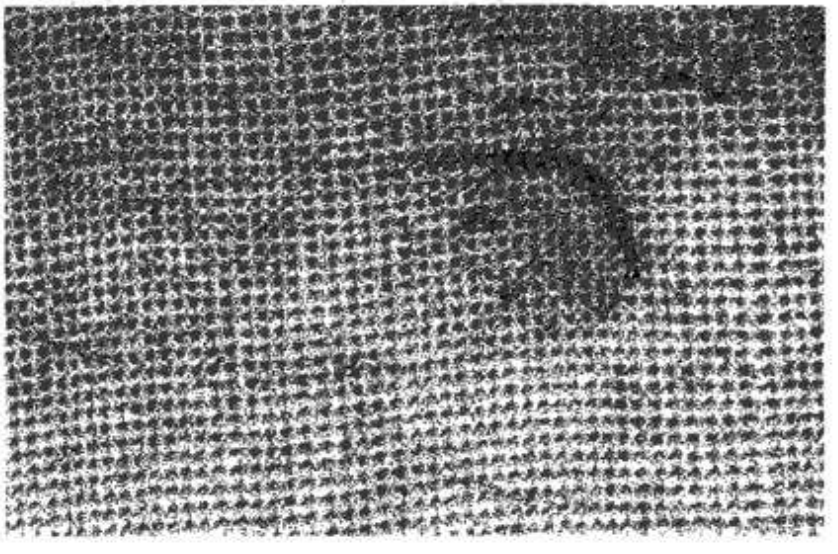
(上) a・b－3・4・5区遺構出土状況　(下) 1・2・3号掘立柱建物出土状況



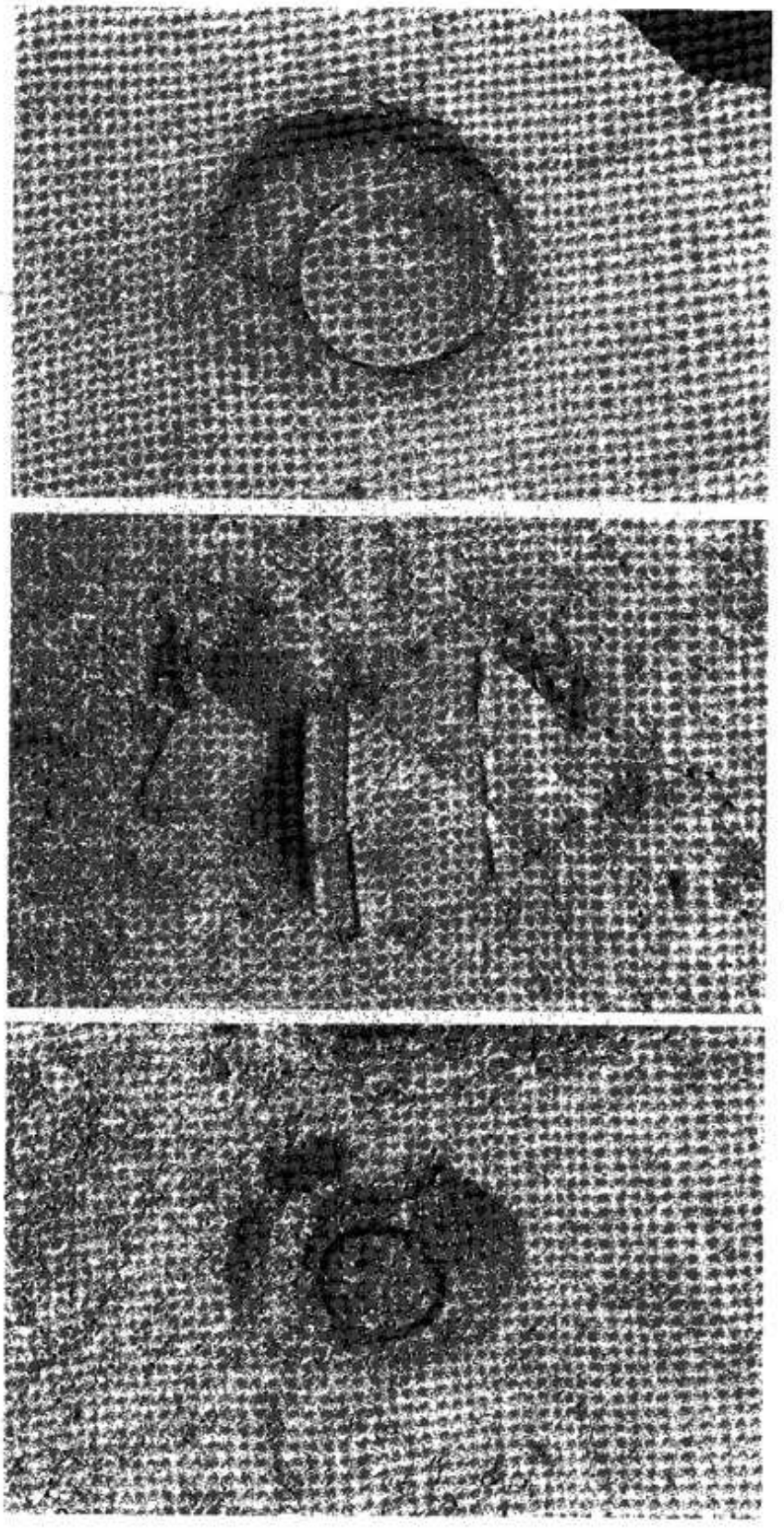
地下式土壙出土状況



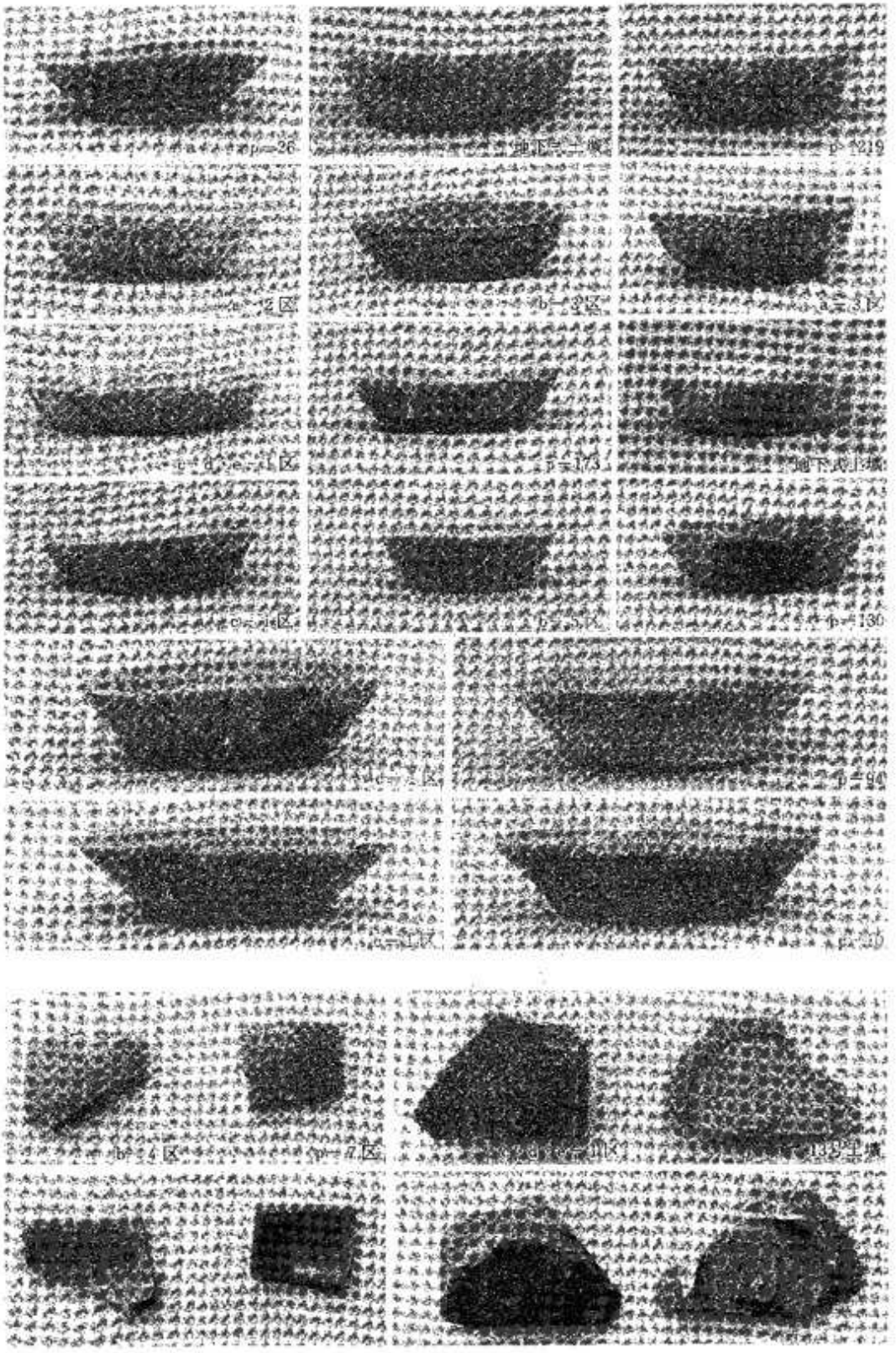




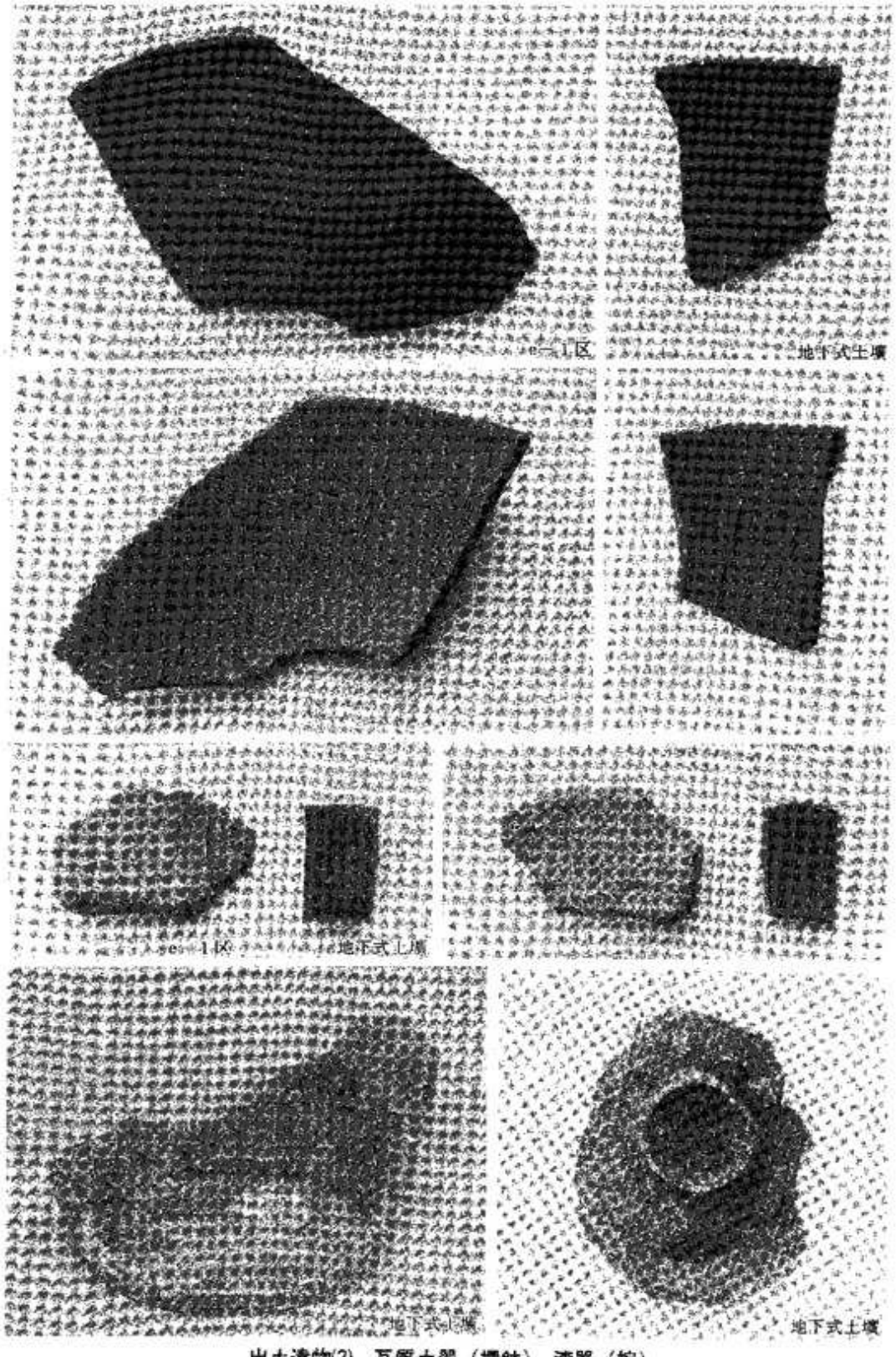
土壙出土状況
(上) 6 号土壙
(中) 7 号土壙
(下) 9 号土壙



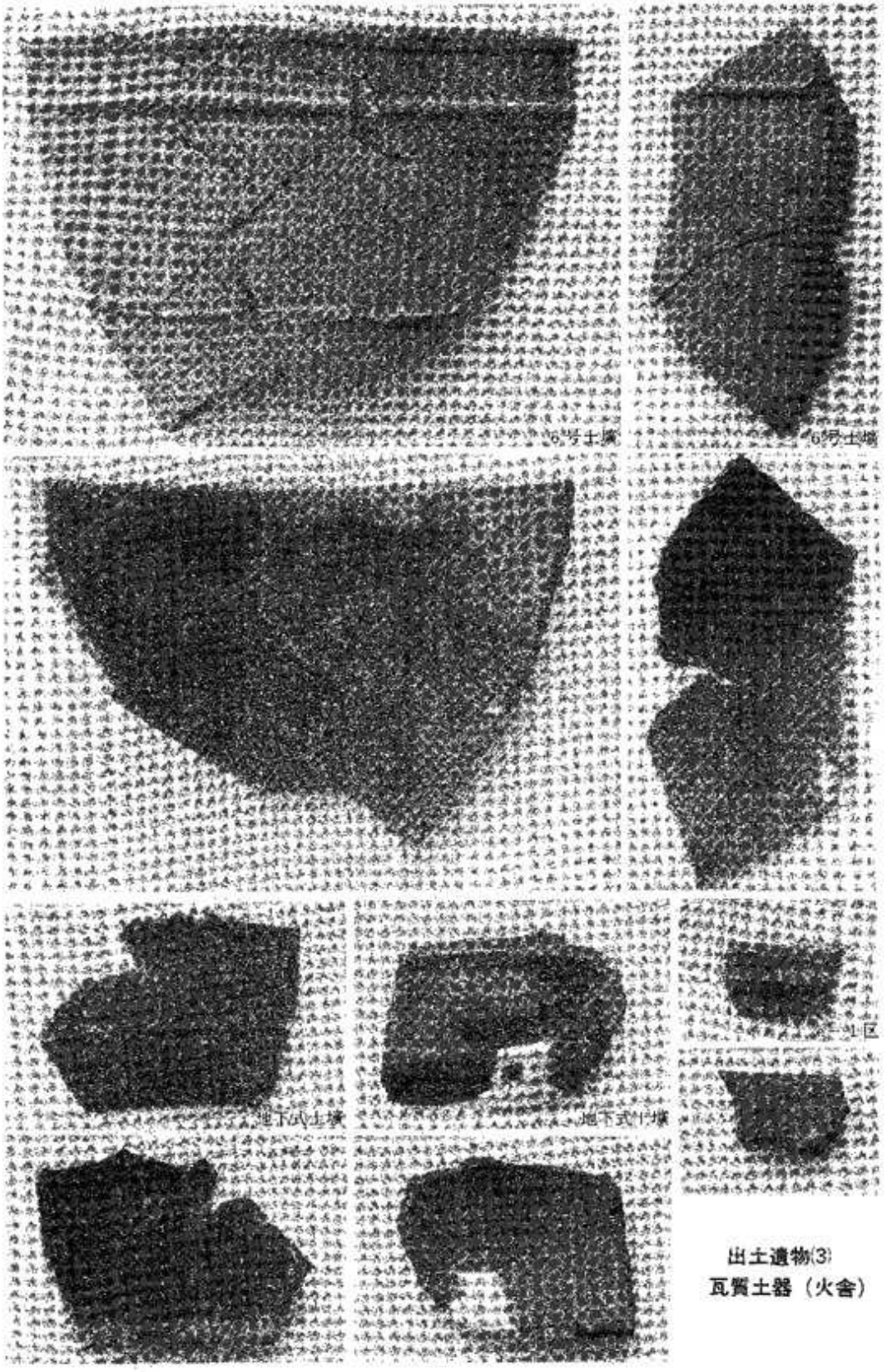
遺物出土状況
(上)土師器　坏
P10
(中)瓦質土器　火舎
6号土壙
(下)漆器椀圧痕
地下式土壙



出土遺物(1)　土師器（皿・坏）　青磁（碗）

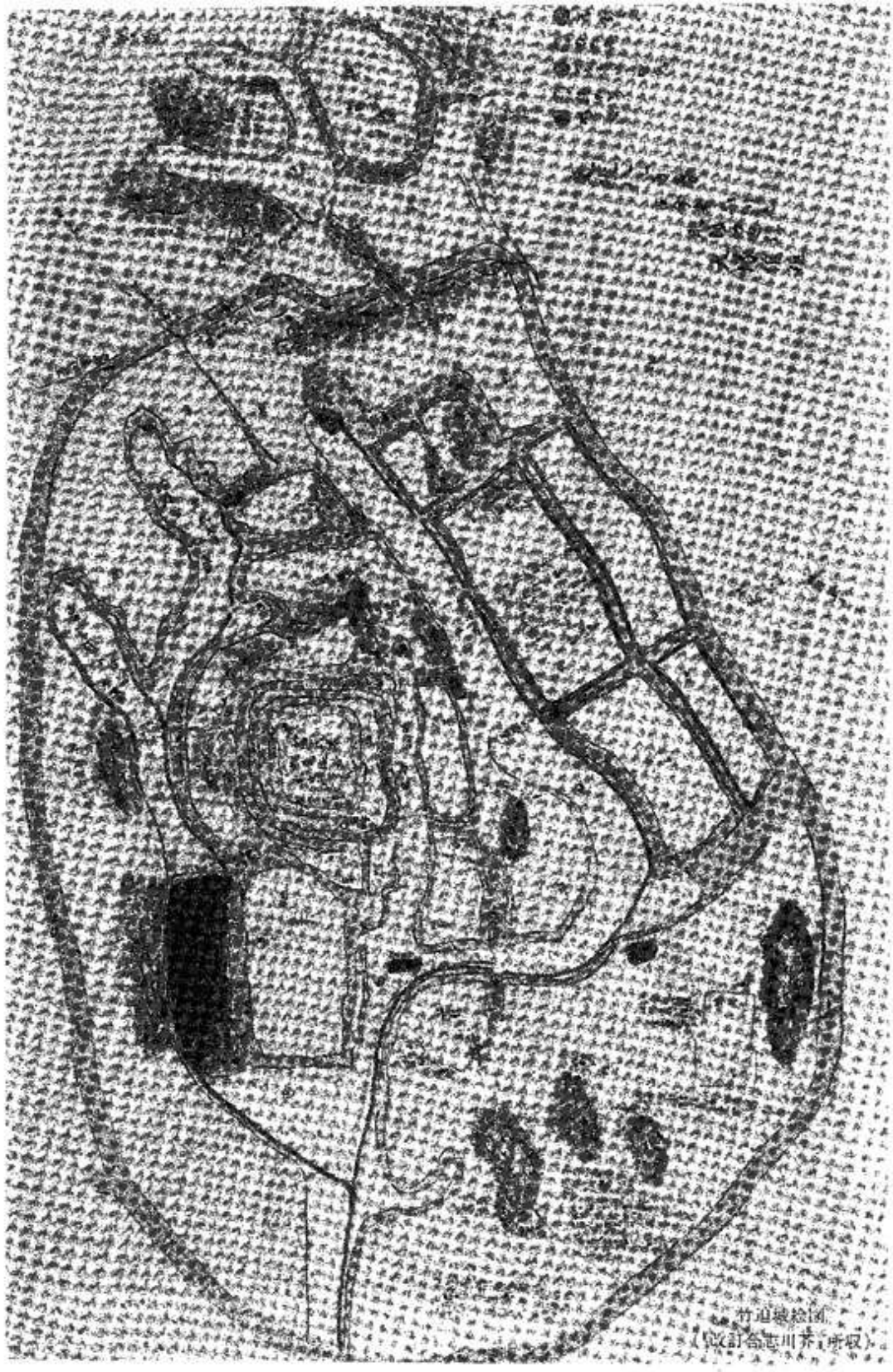


出土遺物(2)　瓦質土器（擂鉢）　漆器（椀）



出土遺物(3)
瓦質土器（火舎）

(上)天正十七年銘墓碑　(下)墓碑銘



竹道場絵図
（改訂合志川井（所収））